特選
（小学生 一・二年生）

「じいじとあかちゃん」

木津川市立城山台小学校　一年　森本　琉奈

だいすきなじいじがきゅうにふつうにおはなしができなくなってしまいました。そしてすぐにびょういんにいったら、のうこうそくといわれてしばらくにゅういんになりました。おかあさんはじいじのことがしんぱいで、なんかいもおみまいにいっていました。

わたしも、いつもいっしょにとらんぷやぼうずめくりをしたり、ごはんをたべたりしているじいじがしんぱいになりました。でもぶじにたいいんしてげんきになったのでいのちがぶじでよかったなとおもいました。

８がつにともだちのおうちにあかちゃんがうまれました。かおやて、あしがちいさくて、かわいかったです。あかいかおでいっぱいあーあーとないてました。おかあさんは「あたらしいいのちがうまれたね。」といいました。

じいじのびょうきはもしかしたらいのちがなくなっていたかもしれないよ、とおかあさんはいいました。あかちゃんはあたらしいいのち、じいじはたすかったいのち。

わたしはいままでいのちってよくわかりませんでした。でもおかあさんから、「いのちがあることはあたりまえじゃないんだよ。いきたくても、なくなってしまういのちもあるんだよ。」とききました。このとき、いのちはたいせつなんだとわかりました。わたしはこれからいのちがあることにかんしゃして、まいにちべんきょうをしたり、おともだちとなかよくしようとおもいます。そうおしえてくれたじいじとあかちゃんにありがとうをつたえたいです。

講評

祖父が脳梗塞で入院した。トランプをしたり、一緒にご飯を食べた思い出を思い返し、心配になるが、無事退院でき、「いのちが無事で良かった」と感じる。一方、友達の家に赤ちゃんが生まれた。顔や手、足が小さくとてもかわいい。母から、祖父は「いのちが亡くなってしまっていたかもしれない」と聞き、「赤ちゃんは新しいいのち、じいじは助かったいのち」と2つの体験を結び付け、「いのち」があることに感謝する。子どもらしく素直に述べている。

特選（小学生三・四年生）

「ぼくのおばあちゃん」

姫路市立東小学校　四年　井手尾　遼

ぼくが、この世の中に生まれてきたのは、おばあちゃんやおじいちゃんが生まれてきてくれたおかげなのです。大むかしからつづく命をつないで、それをぼくたちが引きついでいるのです。

けれど、おばあちゃんは、きょ年、とつ然のうの病気でたおれてしまいました。大きな手じゅつをして、なんとか命は助かったのですが、残念ながら目を開けることも話をすることも、体を動かすことも、自分でこきゅうもできないようになってしまいました。

ずっと、ねむったままなのです。おばあちゃんが元気だったころは、よく会いに行ってたくさん遊んでくれてたのに、急に変わりはててしまいました。

お父さんもお母さんもぼくたちも、そんなすがたのおばあちゃんの事を思うと悲しくて毎日、なみだが出て止まりませんでした。

でも、おばあちゃんは、がんばって生きてくれています。病院の先生やかんごしさんたちが、いつも見守ってくれています。

お見まいに行くと、あいかわらずいつもねむったままのおばあちゃんですが、ふと目をさましそうで、おだやかな顔をしています。のびたかみの毛をきれいにカットしてもらった時は、とてもかわいいおばあちゃんでした。

お母さんは、なやみ事があるとおばあちゃんのあたたかい手をにぎりながら、目を見つめて心と心で会話をするのだそうです。なやみを聞いてもらったおかえしに、おばあちゃんの手か足をマッサージしてあげると、気持ちがいいのか、時どき体がビクッと動くそうです。

まだまだ若いおばあちゃんは、毎日一生けん命生きてくれています。本当はぼくと遊んでほしいけれど、一日でも長くぼくのおばあちゃんのあたたかさを感じていたいのです。がんばってね、おばあちゃん。

講評

祖母が突然の病気で倒れ、意識不明となる。見舞いに行くと、目を開けることも、体を動かすことも、自分で呼吸をすることもできない、変わり果てた姿。祖母のことを思うと最初は涙が止まらなかった。でも、ふと目を覚ましそうなおだやかな顔。母親は悩みがあると祖母の手を握って心で会話し、その御礼にマッサージをすると祖母の体がびくっと反応するのだそうだ。眠ったままでも長生きしてほしいと、祖母への愛情が、子どもらしい表現で描かれている。

特選（小学生五・六年生）

「ツバメから学んだ命」

池田市立石橋南小学校　五年　浪瀬　蓉

今年、ぼくはおじいちゃんの家の近くにあるツバメの巣を観察して、日記を書きました。期間は四月二十五日から七月二十二日までの八十九日間でした。ぼくは観察をしてみて、ツバメは順調に卵からヒナに育ち、巣から旅立っていくものだと思っていました。でも観察結果は全然違いました。

卵は合計二回産まれました。一回目は卵が六つ産まれ、無事に六羽ともヒナになりました。でもヒナが産まれて五日目に一羽いなくなりました。ぼくは何回も数えてみましたがやっぱり一羽いなくなっていました。お母さんにその事を言うと、「巣から落ちてしまって、いなくなってしまったかもね。」と言われました。それでも五羽は元気にエサを親ツバメからもらっていたので観察を続けました。ヒナはどんどん大きくなって、親ツバメのすがたになってきました。ぼくが学校に行っている間は、お母さんや近所のお店のおじさんたちがツバメの様子を見ていてくれました。でもあと三日目もあれば巣立つと思っていたやさきの観察三十八日目の朝、五羽のヒナはカラスにおそわれてしまいました。巣の周りの地面には大量のヒナの羽が落ちていました。そしてぼくは近くの公園で一羽のツバメのヒナの死体を見付けてしまいました。そのすがたを見てすごく悲しくて涙がでました。家に戻りお母さんにそのことを伝えました。お母さんは、「残念だったね。でも自然の世界ではよくある事だよ。カラスも生きているし、カラスもヒナを育てるためにエサが必要なんだよ。」と自然のきびしさを教えてくれました。それを聞いてもやっぱりぼくはとても悲しかったので観察をやめようと思いました。でもそれから三日後同じ巣にまたツバメがやって来ました。一生けん命巣を作り直してまた卵を産む準備をしていたので、ぼくは観察を続けようと思いました。また卵が産まれ、二十四日目にまたヒナが産まれました。今度は五羽のヒナが産まれました。しかし一回目と同じように産まれてから七日目にまた一羽のヒナが巣から落ちてしまいました。近くのお店の人が巣に戻してあげましたが多分死んでし

まいました。でもそれからは順調にヒナは育っていき二回目は四羽のヒナ全部が巣立つ事が出来ました。ぼくはこの期間をツバメと過ごしてみて、自然のきびしさを体で感じることが出来ました。産まれたヒナが全て無事に親になることが出来るわけではなく、ヒナの時から、兄弟でエサをより多くもらうため知えを使って、そして外てきにおそわれないという幸運があって親鳥になるのだと知りました。そして自然界で生きるどの動物にとっても同じ事だとお母さんから教えてもらいました。この観察から人間に産まれたぼくがお父さんやお母さん、家族のみんなからどれだけ大切にしてもらっているか身にしみて知ることができました。だから、これからも一日一日を一生けん命生きて行こうと思います。

講評

89日間にわたるツバメの巣の観察記録。祖父の家の近くのツバメの巣に6羽のヒナが産まれるが、カラスに襲われるなど全て死んでしまう。悲しくなりやめようとするが、数日後に再びツバメがやってきて一生懸命巣作りする姿を見て観察を再開し、今度は5羽が産まれ4羽が巣立つ。自然の厳しさを通して、自分の境遇を再考しているほか、巣の様子や母とのやりとりなど細やかに描写されており、読み手をドキドキ、わくわくさせる作品である。

特選

「命って何だと思う？」

（中学生）
私立滝川第二中学校　一年　高野　泰一

「命って何だと思う？」

小学校の時、一年に一回はこう訊かれる。その度に僕は考えるが、どれも何かちがうなとなって、答えが出ないのだ。そりゃそうだ。分かるはずがない。命について知るにはまず生きるとは何かを考えなければいけない。そして、生きることを知るには死について知らないといけない。つまり命について理解できるのは死後。そう考えていたからだ。

しかし、二〇一六年三月三十一日。この考えに大きな影響を与える出来事が起こった。僕の妹が亡くなったことだ。家族は皆、悲しみに暮れ、各々命について真剣に考えた。少し妹の話をしよう。

妹は二〇一五年、一月十七日、偶然なのだろうか、阪神淡路大震災からちょうど二十年の日に生まれた。家族全員の立会出産で、僕もそこにいた。生まれてきた妹はあまりにも元気がなく、数日後に医者にかかった。『プラダーウィリー症候群』返ってきた言葉はこれだった。知らされて数日の心情を母は、「障害を受け入れる現実の辛さは、言葉では言い表せないほど大きかったけれど、助産院のスタッフや家族、この子をかわいがる兄二人にいやされ、そして助けられた。」と記している。この子の名は、「ちはる。」千の晴れ、『千晴』だ。いつでもはればれとしてほしいという意味と、兄二人の名前、たいちとはるきと共に生きてほしいという意味が込められている。とても良い名だ。大切にしてほしい。

そして月日は流れ三月下旬。僕は、千晴が気を失ったと聞き、病院へとんでいった。千晴はベットで体にいろんなチューブをつながれて寝ていた。そして、もう脳死しているという。僕は胸がいっぱいになった。昨日まで一緒に遊んでいたのだから。そして三月三十一日。雨が降っていた。千晴はもう助からない。これ以上の薬の投与は体への負担が大きすぎる。だから、チューブや機械を全て外し、最期を見送ることにした。シャワーを浴び、服を着せられて、また家族のもとに戻ってきた千晴。この子を見ると、家族五人の日常がよみがえってきた。その時間は長いようで短く、また

短いようで長く僕は感じた。こうした中で、千晴は命を引きとった。その時僕は後悔した。何に後悔したのかは、今でも分からない。しかし、そんな僕とは対照的に、千晴は笑っているように見えた。その後僕とお父さんは何の目的もなく外へ出た。外は雨が止んで、雲から太陽が顔を出している。

今、千晴は我が家の天気の神様になっている。晴れなら「千晴が笑っている。」雨なら「千晴が泣いている。」曇りなら「千晴が寝ている。」という。命については今でもさっぱり分からない。だが、あの日から僕は生きる意味について考えるようになった。答えを出すにはもう少し時間がかかりそうだ。

講評

障害をもって生まれた妹が、一歳二か月で亡くなった。「妹をかわいがる兄二人に助けられた」という母の心情、「いつも晴れ晴れとしていてほしい」という名前の由来など、家族の愛情の深さを感じる。妹が病院に運ばれ、最期を看取るときの様子は心情も含め克明に描かれている。個性的な表現で、妹の名前の由来と関連付けた「天気の神様」のくだりは印象深い。文末の「答えを出すにはもう少し時間がかかる」は筆者の素直な心境を語っている。

準特選

（小学生 一・二年生）

「夏のぴょんぴょんがえる」

私立智辯学園和歌山小学校　二年　野中　一杜

今までぼくは虫がこわかったけど、だんだん虫がさわれるようになってきました。

夏休みのはじめ、おとうさんがかえるをつかまえてくれました。にわをとんでいたのでそのままかごに入れました。ウインナーをちぎっておはしであげました。さいしょはたべなかったけど、だんだんなついてえさをたべるようになりました。

かっているうちにかえるがかわいくなってさわれるようになってきました。ぼくは田んぼに行って自分の手でかえるをつかまえました。そして、かえるに友だちをつくってあげました。ぼくのかえるは二ひきになりました。

にわにバッタがとんでいたので手でつかまえて、かえるのかごに入れてみました。かえるはすぐにしたをのばしてバッタをたべました。だからぼくは毎日バッタをつかまえて、かえるにあげました。

8月のおわりになるとバッタがとれなくなってきました。雨がふったり、すずしくなって、もうバッタがみつからなくなりました。

ある日、かえるがもう一ぴきのかえるをたべました。ぼくはびっくりしました。かえるがバッタをはじめてたべた時もびっくりしたのに、かえるがかえるをたべるなんてしんじられない。たべたかえるはとても大きくなっていました。

かえるは、おなかがすけば、自分とほとんど大きさがかわらないあい手でもたべてしまうそうです。そして、うごいているものしかたべないので、生きたままたべられたみたいです。

ぼくは、かわいそうだなと思いましたが、おかあさんは、

「かえるもひっしで生きているんだね。」

と言いました。

講評

夏休みの初めに父親が一匹の蛙を捕まえてきた。餌を与え育てるうちに愛着が湧き、これまで虫が苦手だったが毎日バッタを採って餌に与えるようになる。そして、自分で蛙を採って友達を作ってあげる。夏が終わり、バッタが採れなくなったある日、一匹の蛙がもう一匹の蛙を食べてしまった。その驚きと憐みの感情がリアルに表現されている。最後に、母親の「蛙も必死で生きているんだね」と、余韻を残して文章を閉じる。心情の変化がよく表されている。

「つながっているいのち」

私立賢明学院小学校　二年　山根　葵緒

「いのちを大切に。」学校の先生がしゅうぎょうしきで話していました。いのちってなんだろう。わたしは、いのちがあるから生きている。見えないけれど、あさおきたり、よるにねむくなったり、ふつうに毎日生きているのは、いのちがあるからだとおもいます。

この前、テレビのばん組で、「おへそは、もともとなんのためにあった?」というもんだいがありました。わからないおとながたくさんいたけど、わたしは前にきいたことがあって、おへそは赤ちゃんとお母さんをつないでいて、そこからえいようをもらって、大きくなることをしっていました。

テレビを見ていたら、お母さんが、「へその緒って見たことある?」ときいてきました。わたしは、「ストローみたいなかんじ?」ときいたら、じゃあ見てみようかと言って、小さな木のはこをもってきました。

わたしは、ドキドキしながら、あけてみました。紙と白いこながついた黒くてほそ長いものが入っていました。「これがへその緒なの、ちょっと気もちわるい。」と、とてもおどろきました。

わたしとお母さんは、このへその緒でおなかの中でつながっていたんだとおもうと、なんだかあたたかい気もちになりました。そして、いのちって、今は見えないけれど、このつながりのことかもしれないとおもいました。

みんなだれかが、だれかとつながっている。お父さんもお母さんも、だれでもつながっている人がいる。けっしてひとりではなく、見えないけれど、生まれる時はかならずつながっていることをしりました。

今は、「いのちを大切に。」という言ばが、わたしにはとてもあたたかくかんじます。いのちは、見えないけれど、みんなかならずだれかとつながっているから、わたしは大切に、生きていきたいとおもいます。

講評

テレビ番組をきっかけに、母親から初めて自分の「へその緒」を見せてもらう。「へその緒」が入った箱を開ける瞬間のどきどきした感情、初めて見た驚きが素直に表現されている。さらに、黒くて細長い「へその緒」を見て、母親とつながっていたんだと、あたたかい気持ちを感じる。この経験をきっかけに、人はみんな誰かとつながっていることを知り、「いのち」を大切にして生きたいと、段階を追って述べられている。子どもらしい発想がおもしろい。

準特選

（小学生 三・四年生）

「いのち」

栗東市立治田西小学校　三年　福山　叶翔

ぼくの家はお父さんもお母さんもはたらいているので、夏休み中も毎日学童保育所に行きました。学童保育所ではたくさん外遊びをして、たくさんのセミをつかまえてはにがしました。夏休みがおわりに近づくと、地面にしんでいるセミを見ることが多くなりました。

8月26日、いつものように外遊びをしていると、地面にひっくり返っているセミを見つけました。少しさわったら、足がごそごそと動いたので、生きている、このままでは、アリに食べられるかもしれない、と思って手にのせました。にげる元気もありませんでした。

お母さんがむかえに来た時、このセミ、もうすぐしにそうやねん、このままやったら、アリに食べられるかもしれへん、かわいそうやし、家にもって帰ってもいい、とききました。お母さんは、セミは自然の中で生きているから、最ごも自然の中でしぬほうがいいよと言いました。ぼくは、なっとくできなかったけど、お母さんにそう言われてセミを木におきにいきました。でも、どうしてもそのセミが気になってはなれられませんでした。お母さんが、そのセミを家につれて帰るのが本当にいいと思うなら持って帰っていいよ、といいました。でも、ぼくは最初に言われたことがどうしてもひっかかり、ぼくもセミは自然の中のほうがいいのではないかと思いました。そしたら、お母さんが、近くの神社につれて行ってあげたらどうか、そこならたくさんの仲まがいて、人にふまれることもないよと教えてくれました。ぼくもそれがいいと思い、セミを神社につれていき、仲まがたくさんいる安全そうな木にセミをおきました。それから、お母さんにお金をもらって、おさいせんを入れ、セミができるだけ長生きしますように、お願いしました。ぼくは、生まれたば所でおだやかに命が終わることがセミにとって幸せなんだと思いました。

講　評

地面にひっくり返っているセミを見つけ、家に持って帰ろうとする。しかし、「自然の中で生きてきたセミにとって、最期も自然の中で死ぬ方がよい」という母親の言葉をきっかけに、セミにとっての一番良い最期の場所を考える。そして、母親と相談しながら、安全で仲間が多い神社の木をセミの最期の場所として選び、お賽銭をあげてセミの長生きをお願いする。生き物を大切に思う優しさと、母親との豊かなやり取りが、子どもらしく素直に描かれている。

準特選

（小学生 三・四年生）

「ドックントックン救命医」

私立京都聖母学院小学校　三年　仁井　奏多

ぼくの心ぞうはドックンドックンと音がします。ぼくの大すきな犬のメイプルの心ぞうはトックントックンと音がします。手を当てると分かります。心ぞうががんばって血えきを送り出している音です。

ぼくの心ぞうは一才の時、止まりかけました。おもいおもい病気にかかったからです。

お医者さんが、

「奏ちゃん生きるよ。」

と言ってマッサージをしてくれました。お母さんは、

「奏多を助けてください。」

と神様にお祈りしました。そうして今もぼくの心ぞうは音を出しています。

いのちってなんだろうと考えました。よく分かりません。でも「生きている」ことは分かります。歩いたり走ったり、泣いたり笑ったりするのは生きているからです。

ぼくの夢は、救急救命医になることです。こまっている患者さんの所へドクターヘリに乗って助けに行きます。「いのち」がとても大切だって分かります。

患者さんもメイプルもぼくもみんないのちを持っています。ドックントックンと音がします。いつも音が聞こえるように守るのです。「生きるよ。」って言えるお医者さんにぼくはなりたいです。

講　評

僕の心臓の音は「ドックンドックン」、飼い犬のメイプルは「トックントックン」。少し違うが、どちらも頑張って血液を送り出す音。一歳の時に心臓の病気になったが、医師の処置と母親の祈りによって、今も心臓は音を出すことが出来ている。「『いのち』とは何か分からないが、泣いたり笑ったりできるので、生きていることは分かる。将来は救急救命医になって、みんなの心臓の音が聞こえるように守りたい」という素直な決意で締めくくっている。

準特選

（小学生 五・六年生）

「頑張る、小さい友達を思って」

神戸市立成徳小学校　六年　土橋　にこ

命とはその人の個性、自分らしさを支えるものだと思います。

私は、四年生のときに三か月ほど入院しました。食事を少ない量で食べ続け、体重がとても減ってしまったからです。救急車で病院に運ばれ、緊急治療室でしばらく過ごしました。今ふり返ると、緊急治療室にいたときが一番つらかったです。同じ年の子どもはいなくて、テレビを見る毎日。看護師の方たちは優しかったですが、不安でした。また、冬休み直前に入院したので冬休みに予定していた旅行を考え、より一そう暗い気持ちになりました。

入院して一、二週間経ったときに病棟が変わりました。長期入院するかもしれないからです。

新たに移動した病棟は、緊急治療室と全くちがいました。緊急治療室には赤ちゃんが多くいて、夜はいつも泣き声がきこえてきました。しかし、新たに移動した病棟には保育園児ぐらいの年の子や、中学生は二人ほどいました。移動して二、三週間は友達もつくれずにさびしかったのですが、ある出来事が起きて私はとてもかわいい友をつくります。

それは、ある日の夜のこと。私がいた病室には三才ぐらいの子が三人ほどいました。その日、私はテレビをお母さんと見ていました。すると、隣のベッドから話し声が聞こえてきました。子どものお母さんはトイレに行きたいけれど、その子は心細くてお母さんにそばにいてほしい、そんな様子です。私は入院する際に動物の人形を持ってきていました。お母さんと私はその人形をその子の所へ持っていき、その子のお母さんがトイレへ行ってる間に遊んであげました。

その出来事があった後、私はだんだんと友達ができてきました。初めは遊んであげた子の友達。時間が経つにつれ、中学生の女の子や私とは一才ちがいの子とも友達になりました。そして、友達が増えていくことにつれて分かったことがありました。ある子はガンと診断されてこうがんざい治療をしていて、またある子は色々な病気にかかっていました。つらいのは私だけではないのだと、思いました。

退院した今でも、友達になったお母さんと文通をしています。しかし、最近手紙が送られなくなってきました。一番最初に友達になった子です。私の方からも、手紙を送らないようになってきました。つらい治療をその子はしているかもしれないのに、私が楽しかったことなどを書くと、より悲しい気持ちになるかもしれないと思うからです。

私は生きたくて、命を守りたくて、つらい治療や入院を頑張る子に出会いました。その中には、私より小さい子もたくさんいました。

私は今自分が健康に、命をつないでいることにもっと感謝し、一日一日を大切に過ごしたいと入院して思いました。

講　評

自分の入院体験を振り返る。最初は不安であったが、徐々に友だちができ、自分よりも小さい子ども達が自分より重い病気や辛い治療にも頑張っていることを知る。そして、健康になった今では「いのち」をつないでいけることに対する感謝を感じている。退院後に文通していた病友の母親からの手紙が途絶えたことに対して、楽しい手紙を見るのはつらいのではないかと、手紙を送るのをやめる。相手を思いやるやさしさが伝わってくる作品である。

準特選

（小学生 五・六年生）

「命と電池」

私立智辯学園和歌山小学校　六年　島川　慶仁

命はとても大切なものだ。多分、人間にとって最も大切なものだと思う。

命がなくなれば人間は死んでしまう。命があるから人間は動いたり考えたりすることができる。

この前、ラジコンで遊んでいる時に、初めは勢いよく動いていた車が、長い時間遊んでいるうちにだんだん動きが遅くなり、とうとう止まってしまった。

その時、ふと思ったのが、自分たち人間の命のことだった。ぼくたちも、生まれてから、子どもの間や若いうちは、元気に走り回ることができる。でも、少しずつ年を取って、老人になると、だんだん動けなくなっていく。

そして、最後は命の火が消えて死んでしまう。命は、ラジコンの中に入っている電池と似ていると感じた。

でも、人の命と電池には大きく違うところがあると気が付いた。電池は、使い始めた時からはじまって、中の電気がなくなれば終わる。とても単純だけど、電気がなくなるまでは終わりは来ない。

でも、人間の命はそうじゃない。テレビのニュースを見ていると、突然車が突っ込んで来て死んでしまった人の話や、犯罪に巻き込まれて殺されてしまった人の話や、自殺してしまった人の話が毎日のように流れている。

人間の命は、電池と違って突然なくなってしまう場合がある。本当なら90才や100才まで生きることができたかもしれないのに突然終わってしまう事がある。普通に最後まで生きることができたら、きっといろんな事が経験できたはずだ。

人間の世界は電池のように単純じゃないから、危険がいっぱいある。命を終わらせたくなかった人たちの命が突然終わってしまうのはとても悲しいことだと思う。

毎日を無事に生きていくことは、実はとても難しいことなのかもしれない。毎日元気に生きていることは、すごいことなのかもしれない。ぼくの中で今日も命は続いているけど、それを当たり前だと思っているのは、間違っているかもしれない。

だから、一日一日を大切にして生き続けていかないといけないと思う。辛いことがあっても、悲しいことがあっても命を大事にして生き続けていくことがすごく大切だと思う。

講　評

勢いよく動いていたラジコンカーが電池切れで止まった。命は電池と似ている。しかし、テレビで事故や事件のニュースをみて、電池は最後まで使うことができるが、人間の命は「突然亡くなることがある」という大きな違いに気が付く。そして、「毎日を無事に生きていられることは、実はすごいこと」とあたりまえの日常への感謝につながる。命についてしっかりと考えをめぐらせ、無理な展開もなく結論に丁寧に導いていくことができている。

準特選（中学生）

「アゲハチョウ」

和歌山大学教育学部附属中学校　一年　狗巻　友祐

夏になった。今年も庭の小さいミカンの木に、アゲハチョウが卵を産みに来た。木のそばを通る度にサナギになる前の緑色の大きい幼虫たちが葉にたくさんいるのを見ていた。でもこの幼虫を見る度にあのことを思い出す。

小三のとき、学校でアゲハチョウの変態の勉強を理科でやった。みんなで観察するために学校へ幼虫を持って行き、家でも飼育箱に入れ玄関のくつ箱の上で観察した。終れい幼虫といわれる緑になった何ともかわいらしい幼虫は、サナギになった。緑色っぽいサナギはだんだん黄色がかってきた。図かんには八日から二週間で羽化すると書いている。毎日、今日か今日かと待った。しかし、書いていた日数をとっくに過ぎてもアゲハが出てこないのだ。サナギに無事になっても、羽化できないものもあるのだろうかと思って心配だった。

日数がたちすぎていたので半ばあきらめていたサナギになって二十日後、学校から帰ると飼育ケースの中でなぜか一ぴきのハチがブンブン飛んでいる。あれ？どこのすき間からハチが入ったんだ？と思った。しかし、外から入ったのではなかった。その、アゲハのサナギから、ハチが羽化したのだ。チ、チョウは・・・？と最初はわけが分からなかった。でも飼育箱の中には、ぽっかりと背中部分に穴のあいたからっぽのサナギのからと、ハチしかいなかった。ミツバチの倍ほどあるスリムな茶色いハチだった。元気に飛んでいた。

調べると、それはアゲハヒメバチというハチで人は刺さない。針は、アゲハの幼虫に卵を産みつけるためだけに使われる。アゲハチョウの幼虫の体の中に産みつけられたアゲハヒメバチの卵はアゲハの幼虫の体の中でかえり、栄養をもらいながら幼虫が少しずつ育ち、サナギになったアゲハチョウを最後には食べて、サナギの中から、成虫となったアゲハヒメバチが羽化して出てきたのだった。奇生バチの一種だった。

美しいアゲハチョウの羽化を期待していただけに、ハチを見た時はショックだった。元気な羽音が、妙に耳ざわりだった。アゲハチョウの体を借りてサナギの中から平気で出てくるなんて、僕はだまされたような、マジックを見せられたような気分だった。

でも、その考えは間違っていて一方的かなと今は思える。アゲハチョウの身になれば、寄生バチに命をあげたことになるので、寄生バチはひどいやつだということになる。しかし、寄生バチの身になれば、無事アゲハの幼虫を見つけて卵を産めて、羽化できたものだということになる。一ぴきのアゲハチョウは二百の卵を産むそうだが、そのうち無事チョウになるものは一つか二つらしい。全部チョウになっても、増えすぎて食べ物が足りなくなり種の保存がかえってできないそうだ。幼虫が鳥に食べられたり、寄生バチに寄生されたりして、一定の数を保って、それで自然はうまくバランスがとれているらしい。その、バランスを保つ仕組みには、ぼくたち人間からすれば、悲しみや、むごさみたいなものがふくまれているのだと感じた。でもそれはアゲハチョウという生き物の側から見るからなのだった。チョウも、ハチも、どちらも精いっぱい習性にしたがって生きている、ただそれだけのはずだ。自然の中のひとつの命を、一方向からだけ見ることはやめようと、この寄生バチの体験から思うようになった。アゲハチョウも、アゲハヒメバチも、ぼくも、一生けん命自分のやるべきことをやって今日も生きている。それが大切で、それだけですばらしいことなのだなと思う。

講　評

庭にいたアゲハチョウの幼虫をみて、小学三年生の時のアゲハチョウの変態の観察記録を思い出す。羽化が遅く、半ば諦めていたとき、蝶に寄生していた蜂が現れた。美しい蝶を期待していただけに蜂を見てショックを受ける。しかし、今ではそれが一方的な見方であったことに気付く。蜂にとっては蝶への寄生が生きていくために必要なことだったんだと。臨場感あふれる豊かな表現で出来事を詳細に記述し、自然の摂理を冷静に見つめている。

準特選（中学生）

「命とは―悲しさと嬉しさに触れて―」

岩出市立岩出中学校　二年　鎌田　琉夏

命は尊いもの。命は大切に守らなければいけないもの。それは、分かる。しかし、何がどう尊いのか。私は分からない。

小学三年生の時に、祖父は亡くなった。当時の私は、祖父がこの世からいなくなったということの意味が分からず、ただ呆然と突っ立っていた。はっきりと覚えている。真夜中、母に起こされ、大急ぎで病院へ向かった。祖父の病室に駆け込むと、眠っているような祖父、医師と何人かの看護師、そして、泣いている祖母の姿が目に飛び込んだ。何も分からず、祖母が泣いているのは初めて見たな、なんて呑気に驚いていたような気がする。「祖父が亡くなった。」そう聞かされると、おかしな気持ちになった。身近な人が亡くなるというのは初めてだったから。自分でも不思議なくらいに、全く涙は出なかった。簡単に信じられなかった。信じたくなかった。ただ眠るようにそこにいる祖父の手は、あたたかくて…。「何で」「どうして」疑問しか沸いてこなかった。そして、一粒も涙をこぼさない自分は、なんて非情なやつなんだ、と怒りが込み上げた。しかし、なぜだろう。もう五年もたった今となって、祖父のことを考えると、涙が止まらない。祖父が病気になる前の元気な姿と、笑顔が脳裏にゆらゆらと浮かび上がっては、消え、ただただ涙が溢れる。命が失われるということは、これ以上ないくらい、悲しく、つらいことだと心から思う。

しかし、命あるものは必ず死ぬ。それは、どんなに悲しく、つらいものであっても、受け入れなければならないことだ。だけど、父がよく言うことがある。それは、人は二回死ぬ、ということだ。一回目は、心臓が止まって、もう二度と動かなくなった時。いわゆる、肉体的な死。対して二回目は、人々の記憶からその人が忘れ去られて、もう二度と思い出されなくなった時。いわゆる、忘却の死だ。一回目の死は、誰にも避けることはできない。けれど、二回目の死は、その人自身や人々によって避けられるのではないか、と私は考える。人々に忘れ去られるということは、肉体的な死よりも、さらに悲しく、つらく、怖いものだと思った。祖父は一回目の死は迎えたけれど、二回目の死はまだ迎えていない。私の心の中で生きているから。そう考えると、祖父の死の悲しみが少し、和らいだような気がした。

だけど、命は悲しいだけじゃない。命ってあたたかくて重いんだな。親戚の赤ちゃんを抱いて思った。怖いからと遠慮していたが、すすめられて抱いてみると、その子はとても静かに、私の腕の中に収まった。あったかいなと思った。少し重いけれど、その重さが何だか特別なもののように感じて、不思議な気持ちになった。小さくてかわいらしい、その新しい命を抱いていると、緊張していた私の顔も、思わずほころんだ。赤ちゃんの周りは幸せそうな雰囲気で、すごく心が穏やかになった。そして、新しい命がもたらす幸せは、非常に大きいものだと気づいた。新しい命が誕生するということは、これ以上ないくらい、嬉しく、幸せなことだと心から思う。

命とは不思議に満ちている。命の何がどう尊いのか。はっきりした答えは、このような体験を通しても、私は分からない。だけど、少し答えに近づいたように思う。命とは、悲しくて、嬉しくて、弱くて、強いもの。これまでもこれからも、命は尊いものだし、大切に守らなければいけないものだ。そして、誰だって死んでしまうけれど、その人を忘れない限り、生き続けること。また、新しい命がもたらす幸せは、とてつもなく大きいこと。このことを心に留めて、私は明日を生きていこうと思う。

講　評

祖父の死と親戚の赤ちゃんの誕生を通して、「いのち」の尊さについて考えている。人の死は二度ある。一度目は心臓が止まった「肉体の死」で、二度目は人の記憶から無くなる「忘却の死」。祖父は自分の心の中で生きており、二度目の死は迎えていない。そう考えると死の悲しみは和らぐ。親戚の赤ちゃんを抱いて新たな「いのち」の誕生の喜びを感じた。二つの体験を通して「いのち」を多面的に捉え、結論に結びつけることができている。

準特選（中学生）

「子供が生まれたら犬を飼いなさい」

私立滝川第二中学校　三年　大岩　あおば

私は以前、「子供が生まれたら犬を飼いなさい」という詩を、耳にしました。これはイギリスの詩です。「子供が生まれたら犬を飼いなさい。子供が赤ん坊の時、子供の良き守り相手になるでしょう。子供が幼少期の時、子供の良き遊び相手となるでしょう。子供が少年期の時、子供の良き理解者になるでしょう。そして子供が青年になった時、自らの死をもって子供に命の尊さを教えるでしょう。」という内容です。私にはとてもイタズラ好きだけど、とても家族思いなお兄ちゃんがいました。今でもお兄ちゃんは大切な存在です。そのお兄ちゃんは、テンといいます。

私がまだ赤ちゃんだった頃、テンはずっと私の隣にいてくれたそうです。一緒にお昼寝をしたり、遊んでいる時も近くで見守ってくれていたり、ご飯を食べている時は机の下で食べ物が落ちてくるのを待っていたそうです。

私が幼少期の時は、よく一緒にイタズラをしていたそうです。一緒に犬小屋に入ってドッグフードを食べていた時もあれば、一緒にお母さんのパソコンのキーボードを壊したこともあったそうです。イタズラ好きのテンちゃんの元で育った私も同じくらいイタズラ好きになっていました。

私が小学生になった頃にはテンちゃんも年をとって、イタズラも減り、寝ていることが多くなりました。私が勉強していると足元で寝ていてくれました。たまに寝転がりながら宿題をしていると教科書の上で寝てしまった時もありました。高学年になると中学受験の勉強のことで親と喧嘩することが増えました。しかし、そんな時でも隣で寄り添って寝ていてくれました。今思えば、とても心強い存在でした。テンちゃんは親よりも私の味方だと思っていました。この頃からテンちゃんは健康診断での数値が悪くなりだし、毎日薬を飲んで、病院に行く回数も増え出しました。

私は受験勉強のことに頭がいっぱいでテンちゃんが死ぬ、とか全く考えずに日々を過ごしていました。しかしさようならをする日は急に訪れました。

三連休を目前に控えた木曜日。私は小学五年生でした。家に帰ると、いつも尻尾を振って迎えてくれるテンちゃんが寝ていました。悪い予感がしたものの、その日は帰ってすぐに塾があったし、昨日も動物病院で診察してもらっていたのでそのまま家を出ました。家に帰るとまだぐったりしていてご飯も食べていないようでした。悪い予感は家族全員に伝染し次の日に病院へ行きました。結果の数値は見たことない程に悪く、私達は察しました。「お別れだ。」と。そこから一日、家族四人水入らずで過ごしました。そして十月十日の朝みんなに見送られ、テンちゃんは死にました。私は大切な存在を失ったのは初めてでした。テンちゃんは抜け殻みたいで冷たいのに穏やかで温かかったです。私は泣きながら空にむかって、

「今までありがとう。」

と何回も叫びました。テンちゃんは自分の命で命の尊さと命を失う悲しさを教えてくれました。

私にとっての命は「この世で一番重い責任」だと思います。一番最初に「子供が生まれたら犬を飼いなさい」という詩を書きましたが、私は今のところ犬は飼いたくないし子供もほしくありません。なぜなら一つの命を育てる責任をとれる自信がないからです。命を育てられる余裕もない人がペットを飼ったり子供を産んだりして、責任がとれなくなり捨てるというニュースをたくさん見ます。私は絶対そんなことはしません。テンという最高のお兄ちゃんが教えてくれたからです。これからもテンちゃんに感謝し、一つ一つの命に責任を持っていきたいです。

講　評

イタズラ好きで家族思いのお兄ちゃん。犬のテンを、愛情を込めてそう呼ぶ。赤ちゃんの頃からいつも隣にいたが、徐々に体が弱り、死んでしまう。テンとの穏やかな生活や悲しい別れが克明に記され、亡くなったテンを「冷たいのに穏やかで温か」とする表現力はすばらしい。ペットを飼うことや子どもを産むことについて、「今は責任をとれる自信がない」と、「いのち」に対する責任の重みを真摯に考えている。冒頭の詩の引用から結論まで筋道が明快である。

優秀賞（小学生）

「ながいきおばあちゃんすごいね。」

神戸市立南落合小学校　一年　石橋　夢

「またいつかあそぼうね。」

おそうしきでてをあわすときに、こころのなかでおはなししたよ。ひいおばあちゃんに、きこえてたらいいな。

みんなみんななないてたよ。わたしもないたよ。おかあさんやおじいちゃんやみんながないているのをみて、てんごくにいったら、いっしょうあえなくなっちゃうっておもっているのかなとかんじたよ。

もういのちがなくなってしまうことは、おきてほしくないな。

いのちはとてもだいじなんだなあってわかったよ。いのちはじぶんのからだにひとつしかないから、じぶんがいきられるまでいきたいな。

わたしは、ひゃくさいのげんきなおばあちゃんにあったことがあるよ。こうりゅうかいでであって、げんきだったからびっくりしたよ。ながくいきられるっていいなっておもったよ。

「わたしのひいおばあちゃん、ながいきしてすごいね。てんごくでみまもっていてね。」

「おきなわのせんそうひげき」

私立仁川学院小学校　一年　野村　優衣

わたしのお父さんは、おしごとでおきなわにいます。なつやすみにおきなわに、お母さんとお兄ちゃんとあそびにいきました。

そのときに、お兄ちゃんといっしょにおきなわのせんそうのツアーにさんかしました。

おきなわのせんそうでは、日本ぐんの人たちよりもおきなわにすんでいた赤ちゃんからおじいちゃんおばあちゃんまでがじぶんたちでしんでしまったり、ころされたりしました。とてもかなしいせんそうとしりました。チビチリガマやひめゆりのおはかなどを見ました。ガマの中は、とってもまっくらで、かい中でんとうをつけないとなにも見えないガマの中でした。せんそうのときは、アメリカぐんに見つからないようにみんなまっくらの中だまってしずかにかくれていました。見つかったらころされてしまうとおもうとほんとうにこわいおもいをしたんだとおもいます。

目のまえでじぶんのかぞくがくるしんでしんでいくのを見るのは、ほんとうにじごくにいるみたいです。

わたしとおなじ6さいの子たちもいっぱいしんでしまったときいて、かなしくなりました。

せんそうはもうぜったいにしてはダメです。人が人をころしあうのは、かみさまからいただいたいのちのありがたさをわすれていることだとおもいました。いのちのたいせつさをみんながしって、せかいじゅうの人たちがなかよくくらせるせかいになってほしいとつよくおもいました。

せんそうはかなしいおもいをするだけで、だれもしあわせにはならないことだから、へいわなせかいがずっとつづくことをねがいます。

せんそうはぜったいにしないこと、ゆるしませんと、こころにつよくおもいました。

「金魚のいのちとわたしのいのち」

豊岡市立五荘小学校　二年　保田　柚乃

夏のあいだ、わたしは金魚のいのちがなくなってしまうまで、いっしょうけんめい金魚のせわをしました。

八月一日、やなぎまつりの夜店で、わたしはおねえちゃんと金魚すくいをしました。

おねえちゃんが四匹の赤い金魚と黒い金魚をあみですくいました。わたしは、赤い金魚を二匹あみですくってつかまえました。

いえにかえって水そうに入れると、赤い金魚たちは仲よくならんでおよいでいました。

黒い金魚は、二匹で少し小さかったので、なんだかおとうとみたいに見えました。

「元気で大きくなってね。」わたしは、おばあちゃんにたのんで、「ブクブクあわの出るきかい」を水そうに入れてもらいました。みどりのモも中に入れてあげました。一匹ずつ、なまえもつけて金魚をかわいがりました。

でも、三日目のあさ、わたしがおきてすぐに水そうを見にいくと、金魚は六匹ともプカプカ水めんにういてくちをパクパクしています。わたしはとてもしんぱいになっておじいちゃんをよびにいきました。おじいちゃんはものしりで魚のこともよく知っているからです。「夜店の金魚はせまいはこに入れられて、とおくからはこばれてくるから弱いいのちの金魚なんかもしれないなぁ。」おじいちゃんのことばをきいて、わたしは金魚がかわいそうになりました。「金魚さん、がんばって生きてくだ

優秀賞（小学生）

さい。」わたしはこえをかけました。

でも、四日目のゆうがた、とうとう金魚は六匹とも天国に行ってしまいました。

おかあさんもおとうさんも「かなしいね。」と話しました。それから、ないているわたしをだっこして、「ゆずののいのちは、とうがぜったいにまもるから。」と、いいました。

わたしは今、げんきないのちで生きています。でも、金魚のようにある日、弱いいのちになったとしても、きっとまけないよ。このときのおとうさんのことばと、金魚のいのちのことは、ずっとわすれません。

「いのち」

大阪市立出来島小学校　三年　蛯原　瑛士

ぼくにとって「いのち」とは、とても大切で、人と人、動物や植物をつなげていくものだと思います。

この前、ぼくは「人はどうして死ぬの？」と思い、「不死身だったらいいのにな。」と思いました。不死身だと何十才、何百才でも生きられるし、事故がおきても生きていられるのに、と思いました。その事をお母さんに話すと、「それはいやだな。」と言っていました。「どうしてかな。」と思い聞いてみると、人は死ぬからいのちを大事にするし、生きたいと思うから、つらい事があってもがんばれるから。それに、もし自分だけ不死身だとしたら、ぼくも、ぼくの子どもも大きくなっていくのを見られるけど、自分より子どもたちが先に死んでいくのを見たくないし、だんだんとまわりに知らない人がふえていくのがいやだからだと言っていました。それに、「あぶない事も平気でしてしまうでしょ。」と言っていました。ぼくは、お母さんの話を聞いて、そうだなと思いました。いのちが大切だと思っているから信号を守ったり、車に気をつけたり、ふみきりがなったら止まったりしていたのだと思いました。

テレビを見ていたら、ニュースで人がたくさん死んだりしていて、自分から死んでしまったり、ころされたりしているのを見ると、悲しくなります。死んだ人だけではなく、その家族やまわりの人も悲しくなるので、もっとみんながいのちを大切にして、何かつらい事があれば、まわりの人にそうだんするといいと思います。一人一人がいのちを大切にすると、もっと日本がすみやすく、そして、せかいが仲よくなると思います。人だけでなく、動物も植物もいのちがあるからふえていくし、お花もきれいにさいていると思います。動物を見てかわいいと思ったり、お花を見てきれいだなと思ったりすると、人も動物も植物もみんないのちがあるからつながっているのだと思いました。

「命のつながり―昔、今、未来」

私立甲南小学校　三年　井野上　碧泉

今年の八月十六日も、京都の五山の送り火を、青れん院門ぜき青りゅうでんから、家族で見ました。

五山の送り火は毎年見ていますが、これまでは、どういう意味があるのかあまりよく分かりませんでした。でも、今年、京都市内の山に灯されていく送り火を見ながら、ご先祖様のれいをあの世に送り帰すという意味がある事を知って、命のつながりについて考える事が、とてもおもしろくなりました。

私のご先祖様の事をお母さんに聞いたら、お母さんが「家系図」というものを見せてくれました。たてにずらりと人の名前が書いてあって、一番下に私の名前が書いてあります。親せき中の名前が書いてあり、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんまでは分かりましたが、その上もずっと続いています。ご先祖様がいて、ずっと命がつながっていたから、私が生まれたのだなあと、不思議な気持ちになりました。

図かんで人間のたん生を調べて見ると、人間が出て来たのは一万年位前だと書いてあります。何億年もある地球の歴史の中では最近のようですが、私から見たらはるか昔の事です。でも、「家系図」と地球の歴史を一緒に考えてみると、私も地球の歴史を作っていく命の一つなのだなと思いました。

私が大きくなったら、子どもを生むかも知れません。またその子どもも、子どもを生むかも知れません。そうして、命がどんどんつながっていくのだと思うと、とてもわくわくしてきて、ずっと先の未来まで見たくなります。そのためには、今生きている私たちが、地球上で助け合い、協力していけば、これまでよりももっと楽しい人間の歴史が続いていくと、私は思います。

五山の送り火の一つ一つが、ご先祖様のれいのように見えて、「これからもやさしく見守っていて下さい。」と、心の中で、強くお願いしました。

優秀賞（小学生）

「うめちゃんと初めてのお花見」

私立大阪信愛学院小学校　四年　溝原　ちさと

うめちゃんというのは、わが家でかっている生後7ヵ月になる紀州犬です。紀州のうめから名付けました。

初めてのお花見先で、私の人生最大のハプニングが起こりました。

お母さんが犬をだっこしていて、坂道でころんだのです。

お父さんと私は、

「どじやな」

と笑っていると、お母さんが動かなくなってしまいました。

しずかにお母さんが言いました。

「おれた…」

まわりの人の助けもあり、救急車で病院に運ばれました。私は、救急車に運ばれるお母さんと、はなればなれになってしまいました。

お母さんは、笑って、「大丈夫だから」と言いましたが、あとから聞くと、私の不安そうな顔を見て、いたみをガマンしたそうです。

手じゅつと入院している間に、私は4年生になりました。

初めてのクラスに登校するときは、とても不安でしたが、お母さんを心配させないように、がんばりました。でも、4年生最初のテストで初めて再テストになってしまいました。

すると、お母さんが、

「毎日、病院に来てくれて、おてつだいしてくれてありがとうね。お母さんから100点をあげるよ。」

といってもらいました。それで、私は、

「ううん。私もさみしくてあいに来てるから。それに、かみの毛も上手にくくれるようになったから。」

といいました。

私がこのつらいけいけんで学んだことは、やっぱり、どれだけ家族が大切かということです。

「ぼくとおじいちゃん」

箕面市立東小学校　四年　須田　恵多

ぼくは、おじいちゃんが大すきです。おじいちゃんは、3年まえにしにました。おじいちゃんは、急にびょうきがわるくなりました。すこしまえまでいっしょにあそんでいたのにびょういんのベッドでねています。やせて体もきいろくて、スーパーサイヤ人みたいでした。おじいちゃんじゃないみたいでした。ぼくはどんどんこわくなりました。おじいちゃんのちかくにいけませんでした。どんどん息が小さくなっていきました。たいようがみえてきたとき、おじいちゃんの息がとまりました。しんだというより、ねているみたいでした。おじいちゃんといっしょに、おじいちゃんのおうちにかえってきました。きいろかったおじいちゃんが、いつものおじいちゃんにもどっていました。声をかけても、さわっても、たたいても、おじいちゃんはおきてきませんでした。やっぱりしんでいるのだと思いました。おそうしきがおわりました。おじいちゃんは骨になりました。おそらにいきました。でも、なぜかちかくにいるようなきがします。いつものばしょにすわっているようにみえました。

おばあちゃんからスーツケースをもらいました。おじいちゃんがいっしょにりょこうにいくのに、あたらしくかったものです。おじいちゃんがつくれなかった思い出を、ぼくがかわりにつくろうと思いました。このスーツケースをもっていると、おじいちゃんもいっしょにりょこうにきているようなきがします。

「動物も人も幸せに」

神戸市立南落合小学校　四年　相原　芽生

わたしは、夏休みに神戸市動物管理センターの動物愛護スクールに参加しました。

そこでは、動物たちとのふれあい方を話し合って考えたり、センターに来る動物たちのことを教えてもらったりしました。わたしが心にのこったことは、一年間でやく六百匹の犬やねこがセンターに来る中で三匹に一匹が命を落とす結果になってしまっていることです。

この日は、新しい飼い主をまっている犬やねこたちとふれあうこともできました。遊びたがってよってくる犬もいれば、こわがってへやのすみにじっとすわっている犬もいました。言葉は話せなくてもとても不安に思っていることがつたわってきました。その子たちが幸せになれる飼い主さんが早く見つかってほしいと思いました。

家に帰ってからも「犬やねこたちはなにも悪くないのに、人間の勝手な理由で命を落とすことになっている。」と思っていると、なみだが出てきました。センターの人は、一つでも多く

の命がたすかるために、センターに来る犬やねこたちのことやセンターがどんなはたらきをしているかをたくさんの人に知ってほしいとなんども言っていました。つらい気持ちになることもあるけど、知ることで助かる命もあると思いました。

わたしたちにできることは、犬やねこを飼うときはセンターからひきとること、犬やねこにとって住みやすい環境を用意すること、十年二十年後に自分や家族がどんなくらしをしているかを想像してさいごまで飼えるのかを考えて飼うことだと勉強しました。わたしは、犬やねこが大好きなので飼いたいとずっと思っていますが、今は飼えない家に住んでいるのでがまんしています。いつか飼うことができる環境になったら、センターから犬やねこをひきとっていっしょに幸せにくらしたいです。

「びんの中の小さな命」

姫路市立東小学校　四年　福田　愛椛

わたしが三年生のとき、校長先生からカブトムシのよう虫を一人一ぴきいただきました。暗い土の中にほったらかしのままでたまに水をあげるだけだったのにどうやって大きくなっていくのかふしぎでした。そして、校長先生からふよう土を食べて大きくなっていくことがわかりました。

早く大きくなって出てきてほしいなと思いながら何ヶ月もたって茶色のさなぎになっているのに気がつきました。もうちょっとで大きなカブトムシになって土の中から出てくると思うとうれしくなりました。

四年生の夏休み前に家にもって帰り、家族に見せると「初めてさなぎを見た」「学校でここまで大きくなったんだな」とびっくりされました。もって帰ったのはいいけど育て方がわかりません。このままほっておいていいのかしんぱいになりました。毎日見ても動いているようすがありません。しんぱいになってスマホで調べてみると死んでいることに気がつきました。

長い間学校でかっていたのに、大人になれないまま死んでしまったカブトムシはとてもかわいそうで、また生まれかわれるようにとねがいをこめて家の外にうめてあげました。

ちゃんと育て方を勉強してお世話をしてあげていたら強くりっぱなせい虫になって山に帰れたかもしれないのに。そしてなかまといっしょに木のみつをすいに飛び回っていたかもしれません。

この間、お母さんと一しょに「ひめじ教育フォーラム２０１９」を聞きに行きました。その中に、安とみ北小学校の人たちがホタルを育てていることを発表していました。

ぜつめつするかもしれないホタルにたまごをうませて大きくなるまで育てているスライドを見ました。こんな小さな虫を一から大事に育てていてすごいなと思いました。育てるのにいろいろ勉強されていました。

大きな虫、小さな虫、生き物すべてに命があります。

これから何かを育てる時には、大事にしそして勉強しながら育てていきたいです。

「ミケとのさいごの５日間」

姫路市立東小学校　四年　宮岡　颯太

「ミケの元気がないんや」

おじいちゃんからきいた。ミケとは、おじいちゃんの家でかっているネコです。ミケは15年ぐらい前に、おじいちゃんがほごしたノラネコです。死にそうになっていたネコを近所の人が連れてきたそうです。おじいちゃんが必死にミルクをやったりして生きることができました。ぼくはミケが大好きでした。ミケは、いやがったりしませんでした。おじいちゃんの家に行く時はミケがいるだけで楽しい気分になれました。そのミケが元気がなくなったので次の日から毎日おじいちゃんの家にいくことにしました。1日目は台所でじっとしていました。体をさわると体はカチカチでした。水がのみたいのか水の前でじっとしているだけで、しっぽの先だけが少し動いていました。ぼくは、さみしくて泣いてしまいました。2日目は前の日より少し歩いていました。ぼくが「ミケちゃん」というとのそのそと歩いてぼくのところにきてくれました。「明日は、来れないから金よう日まで死なんといてな」と言いました。4日目学校からかえってくるとミケは、まだ生きていてくれました。習字にいってもどるとほとんど動いていませんでした。お母さんが「ミケちゃん、ちゃんとまっててくれたね」といいました。その日の夜おじいちゃんから「ミケ死んだで」と電話がありました。ぼくは、おこづかいで花を買ってミケのお別れに行きました。ミケは、ダンボールの中でねているようでした。花がたくさんいれてありました。ぼくも花をいれて体をさわりました。体は冷たくなり前よりかちかちになっていました。これがぼくとミケとのさいごの5日間の話です。

優秀賞（小学生）

「きせきの生命力」

小野市立河合小学校　四年　山中　湊太

去年おばあちゃん家の外でスイカを食べました。今年その食べた場所からなんとスイカの葉がでてきていました。おばあちゃんもぼくも育てた覚えがありません。

どうしてそこからスイカの葉が出てきたのか考えてみました。去年スイカを食べた時マンガみたいにたねをプププと飛ばしました。まさかふいた所から葉がでてくるなんて思いもしませんでした。ぼくは、やさいを育てたことがあります。育てるためには、たがやしたり、水をまいたり、ひりょうをまいたりしないと育ちません。それなのにスイカの葉がでてきたのがびっくりです。

今では、そのスイカが一日一日大きく成長しています。自然の力で育ったスイカの生命力がすごいとあらためて思いました。あと少しで食べれるのが楽しみです。生命力に感しゃして美味しくいただきたいと思います。

「いのち」

たつの市立小宅小学校　四年　浦川　凌大

お母さんが泣いているのをはじめて見た。

ぼくのお母さんは、とても元気で、

「あはははは」

と、よくわらう。

そんなお母さんが、目からたくさんなみだを流して泣いていた。

すごく暑い夏におばあちゃんが死んだ。

おばあちゃんは料理が上手で、とってもやさしいおばあちゃんでした。

おばあちゃんとのお別れはぼくも悲しかった。最期のお別れの時、お母さんがぼくの手をギュっとにぎった。暑い日なのに手がつめたく思った。

今でもおばあちゃんの思い出の話しをよくするお母さん、きっとお母さんの中では、おばあちゃんは今でも元気なんだと思う。

「いのちについて」

たつの市立小宅小学校　四年　川口　倭

ぼくは、同じクラスの友達から、こんな話を聞きました。「ぼくには、もう一人妹がうまれてくるはずやったけど、お母さんのおなかの中で死んでしまっていたんや」とさみしそうにぼくに教えてくれました。生まれてこれない赤ちゃんがいる事を初めて知りました。お母さんにその話をすると、「そうやで、生まれてこれたのは、あたり前じゃないんやで。」と言いました。ぼくは、お母さんのおなかにいる時に何度もお母さんは入院したそうです。ぼくがおなかの中で大きくなって生まれてこれるように、動けずにねたきりだったそうです。もしその時おなかの中で死んでいたら、この世にいないのだな、と悲しくなりました。生まれてこなかったらお母さんや家族にも会えていないのです。お母さんは、ぼくが生まれてきた時すごくうれしくてありがとうと思ったそうです。ぼくは、その話を聞いて、とてもうれしい気持ちになりました。ぼくが生きている事は、お母さんや家族もうれしい事なんだなと思った。いのちは、自分だけのものではないんだな。お母さんからもらった命を大切に、生まれてこれた事に感しゃして、楽しくくらしていきたいです。

「たん生と別れ」

彦根市立城東小学校　五年　山田　亜美

今年に入って私は、大きな出来事が二つおこりました。

一つ目は、新しいいとこが生まれた事です。一月八日に元気な女の子、名前はさきちゃんです。私は、生まれたばかりの赤ちゃんを見ることも、だくのも初めてだったので、きんちょうしました。さきちゃんはとてもやわらかく、温かかったです。指を出してみると、小さなその手でギュッとにぎってくれました。さきちゃんをだいていると、お母さんがこんな話をしてくれました。「赤ちゃんは、お母さんといっしょにがんばるけど、最後は自分の力で一人で生まれてくるんだよ。あみちゃんもさきちゃんみたいに生まれてきたんだよ。」と言いました。赤ちゃんは小さくてもすごいパワーを持っているんだと知りました。赤ちゃんがいるだけでみんな笑顔になり、やさしい気持ちになります。新しいいのちは、キラキラかがやいていました。私達一人一人もきっと特別なそん在なんだと気付きました。

二つ目は、六月十三日にいっしょに住んでいるひいおじいちゃんが亡くなった事です。

ひいおじいちゃんは、やさしくて、いつも私のひくピアノや毛筆の字をほめてくれました。学校に行く時には、手をふっ

優秀賞（小学生）

てくれたり、「いってらっしゃい。」「がんばりや。」と元気に声をかけてくれました。でもひいおじいちゃんはずっと認知しょうでした。だから、同じことを何度も聞く事や、話す事をくり返していました。時には、大声を出してあばれたり、ぼう力をふるう事もあったので私は、とてもこわかったです。病気がひどくなり、病院ににゅう院することになりました。いつもいるはずのひいおじいちゃんがいなくなり、さびしくなりました。そして、ひいおじいちゃんはごえん性はい炎をおこしだんだんと悪くなっていきました。見るたびどんどんやせていき、まるで手や足がほそい木のようになってしまいました。さんそマスクをつけながらも声にならない声で「ありがとう。」と言ってくれました。病院からあぶないと連絡が入り、かけつけた次の朝天国に旅だっていきました。ひいおじいちゃんはかたくてつめたかったけどきれいで今にも声をかけてくれそうな気がしました。そう思うと私はなみだがあふれそうでした。お母さんがこう言いました。「おじいちゃんは、最後まで一人でがんばったんだよ。これでゆっくり休めるね。」と。

この半年で命のたん生と命の別れを体験し、私が思ったことは、生まれてくる時も死ぬ時も人間はみんな一人でのりこえるものだということです。私がここにいるということも特別ですごいことだと思いました。なぜなら、私もお母さんのおなかの中から一人でがんばってでてきているからです。

ひいおじいちゃんのこつ上げに向かう時、大きくて、太いあざやかなにじがかかっていました。まるでひいおじいちゃんが私に、あみちゃんがんばれよと言って応えんしてくれているような気がしました。

「幸せの意味とは」

近江八幡市立安土小学校　五年　木枝　陽菜子

命は線路を走る電車に似ている。電車は休みなく走っている。ときどきなやんで減速することもあるけれど、いつか元通りになって、また同じスピードで走り始める。だけれど、まだ走れる電車なのに、自ら線路を切って、電車を止めてしまう人がいる。私は、そういう事を知るたびに、

「その人はつらい事があったのだろうけど、それを病気で亡くなってしまった人が知ったら、どういう気持ちかな。」

と思ってしまう。そう、この世界には生きたくても生きられない人や、生きることだけを目標に、重い病気と必死に戦っている人がいる。私も、今年、そんな人を見た。

今年の夏、私のおじいちゃんが天国に行った。おじいちゃんは、昔は電気工事の仕事一すじだったそうだ。ところが、高い所で仕事をしている時に、下に落ちてしまい、こしのほねを折ってしまった。それからは、1本づえになり、2本づえ、最後には車いすになってしまった。しかも、がんにかかってしまい、何回も何回も抗がん剤治りょうをし、さらには、心ぞう・脳の病気にもかかった。けれど、おじいちゃんは生きることをあきらめなかった。リハビリや手じゅつもがんばり、たくさんの病を乗りこえてきた。だが、最後の病にはたえ切れず、77才で人生のまくを閉じた。しかし、おじいちゃんはなぜ生きることをあきらめなかったのだろう。それはきっと、ステンドガラス作りというしゅみがあり、それに、愛する人がそばにいたからだと思う。そだてた子どもは大人になり、私が言うのもなんだけど、まごもいる。そして、自分の事を一番に考えてくれる奥さん、私のおばあちゃんもいる。それが、おじいちゃんの生きるささえ、生きる希望になったのだ。

人の中には、少しの期間の苦つうで、「私はもうこの世にいる意味がない。」と思ってしまう弱い人がいる。だけど、そうならないような、強い人になるには、どうしたらいいのだろう。私が思うには、死んでもうら切れない、愛する人ができることだと思う。自分を大切に思ってくれる人がいれば、その人のために生きようと思えるので、かんたんに生きる希望を失わないと思った。そのとき人は、はじめて幸せといえるのだろう。

「会いたい」

池田市立石橋南小学校　五年　白井　凛太郎

ぼくは、6年前まで4人きょうだいでした。今は3人きょうだいです。

なぜなら、6年前にいちばん上のおねえちゃんが、病気で死んでしまったからです。

いちばん上のおねえちゃんと言っても、生きていたら、ぼくと同じ5年生で、いつも一緒にいるくらい仲が良かったです。

今日は、そのおねえちゃんが死んだ6年前の話をしたいと思います。

その日は、お昼ぐらいから気分が悪くて、吐いてしまったので、お母さんが、かかりつけの病院に電話をして、次の日の朝いちばんに病院に行く事になりました。

でも、その日の夜中に異変がありました。

眠っていたはずのおねえちゃんが、息をしていないのです。

優秀賞（小学生）

お母さんが、救急車を呼んで、おねえちゃんは救急車に乗って行きました。

そのまま、おねえちゃんは帰ってきませんでした。

それが、ぼくがおねえちゃんと過ごす最後の日になるなんて思いもしませんでした。

当時のぼくは、人の死についてあまりよく分かっていませんでした。

日がたつにつれ、おねえちゃんに会えないのなんで？会いたいよう。会いたいよう。という気持ちが強くなっていきました。

人は、死んだら二度と会えないからこそ、生きている人は、自分の人生を大事にしないといけないと思う。

ぼくのおねえちゃんみたいに病気で生きたくても生きれない人、事故や災害で死んでしまった人は、自分で死をのぞんだわけじゃないのに死んでしまって悲しい思いをしている一方で、今、世の中には、自ら死をのぞんで死んでしまう人もいるけど、ぼくは、どんな人にも生きてほしいと強く思います。

もういちど言います。

死んだら二度と会えません。

「心の中で生きるあなた」

東大阪市立成和小学校　五年　岡　奈那

私が、大きな声で

「ただいま!!」

と言うと、あなたはがんばって声を張って

「おかえり！」

と言ってくれた。あなたは、いつも声を張っておかえりと暖かな声で言ってくれた。その声は、いつも明るくて元気をもらったんだよ。あなたの声はいつも、私を救ってくれたんだ。私が泣いているときは、

「泣くと、弱く見られるから、泣くのはやめて、笑って見せつけたり、私はそんなに弱くない。あんたが弱いんじゃないの？だから、他人を泣かすんでしょって見せつけたり。」

あなたはとても心が強い人でした。私が泣くのをやめたら、

「それでこそ私のひ孫や。心強く育ってや。」

その言葉には何度も救われていました。

気付けば私は笑っていてあなたも笑っていました。

あなたは、病院通いになってしまいあまり遊べなくなってしまって、私は遊び相手がいなくなってしまいました。そのとき私は、さみしかったのを今でもおぼえています。

当時の私は、人が死ぬことを知らずに、ずっと一緒にいられる、とばかり思っていました。

私が大切にしていた金魚が死んでしまって私は大泣きしてしまいました。その時に、生き物は死んでしまうんだ、いなくなってしまうんだ、とわかりました。私は、もし人が死んでしまうならあなたもいなくなるのかな、ずっと一緒にいたいのに、と思っていました。私はずっと一緒にいたいというのはかなわぬ願いだと思いました。私は、

「私もいつかはなくなっちゃうんだよね・・・。もし、私がいなくなってしまったら、みんなは、泣いてくれるかな？かなしんでくれるのかな？そもそも、人は死んでしまうのかな。」と、一人静かな部屋で言いました。

あなたは入院をしてしまって話すことができませんでした。

家に帰ってあなたとはたくさんの話をしたときが一番楽しかったのを今でもおぼえています。

あなたは、運動（スポーツ）が大好きでした。とくに、野球とマラソンが大好きでした。あなたは、

「私はね、マラソン大会に一回出たことがあるんだよ。一位だと思っていたけど、友達が一位で私は二位で、すごくくやしかったのを今でもおぼえていてね、負けたけど、楽しかったんだよ。」と話してくれました。

私はあなたが大好きでした。あなたは何度も入院をしていました。おみまいに行くたびに話せなくなっていってしまいました。あなたは、もう目をあけてはいませんでした。

今は声も聞けないけど、あなたは今でも、これからも、いえ私がいなくなるまであなたは私の心の中で笑ってくれています。夢の中でもたくさん笑って遊んで頭をなでてくれます。あなたは私の中で笑って生きています。

「自分にできること」

神戸市立東町小学校　五年　岸本　成美

「かわいすぎるー!!」

これが初めに思ったことでした。私達五年生は、命の感動体験をさせてもらいました。体育館をのぞいたしゅん間、矢が心にささったかのように、赤ちゃんにみとれてしまいました。自分のはんについたら、一人の赤ちゃんが私の所に来てくれました。見るからに、ほっぺがぷにぷにでよちよち歩きで、もうかわいいしか言いようがないくらいでした。

初めは手遊びから始まり、次に、お母さん達に質問をさせ

優秀賞（小学生）

てもらうことになりました。いくつか、質問をさせてもらいましたが、一番心に残った質問の答えは、自分の赤ちゃんの好きなところは何ですかという質問の答えでした。その答えは、「笑顔」でした。赤ちゃんだけでなく、誰か一人でも笑ったら、その人自身も周りの人も、幸せな気持ちになるのかなと思いました。

私は、「いのちのまつり」の歌詞にあるように、全ての命にかがやいてほしいなと思いました。

じゃあ、そのためには私に何ができるかを考えてみました。それは命を救うことだと考えました。私の将来の夢は医者になって、たくさんの人々を救うことです。たくさん、命を救って、一つでも多くの命にかがやいてほしいです。

私は、命の感動体験で、私達は当たり前に生きているけれど、生まれて来たことはきせきなんだということを改めて感じました。だから、一つでも多くの命を救って、一つでも多くの命をかがやかせられる医者になりたいです。そして、自分の命を大切にして、生きたいです。

「育ててくれてありがとう」

神戸市立東町小学校　五年　小出　万尋

「昨日の夜、山形県と新潟県でしん度六強のじしんがおきました。」

今日は六月十九日。朝、起きると、ニュースのアナウンサーが言っていました。私は、じしんがおきた時、勉強していたので知っていたけれど、でもやっぱり、聞いた時はショックを受けます。きっと朝になるまで、こわくてねられなかった人もいると思います。しかも、山形県と新潟県は梅雨入りしていると思うのでもしも大雨などがふったら、家がくずれてしまうかもしれないから、すごく不安だと思います。

日本はじしんがおきることが多いです。私も十一年生きているなかで、大きなじしんがおきたことを何度も聞いています。私はそのつど、命のことについて考えさせられます。それは、あたりまえに生きていることはとてもありがたいことだということです。なぜかというと、もし、野菜や米などを育てる人がいなくなったら、私たちはごはんが食べられなくなってしまいます。もし、お母さんやお父さんがいなくなったら、困ることがたくさんあって言いきれないほどあると思います。だから、じしんにあって困っている人たちを今度は私たちが支えるばんだと思います。

また、学校の「命の感動体験」でお母さんは私が小さいころすごく大切に育ててくれたことが分かりました。そして、びっくりしたことがあってそれは、「私が生まれた時の体重と身長、教えて。」と言うとすぐに何にも見ずに答えてくれたことです。その時、とてもうれしかったです。私は今、お母さんとお父さんに「育ててくれてありがとう。」と言いたいです。

「赤ちゃんの力はまほう」

神戸市立東町小学校　五年　髙谷　和

「ピロリロン。ピロリロン。」

私はこの音におこされた。

私の二人目の弟が産まれたのは八月五日午前三時ごろ。真夜中だった。私は家でねていた。その時「パッ」と目がさめた。私の目の前でお母さんがへやの中を歩いていた。そのあとお母さんはびょういんへむかった。私はこの時みずから真夜中に目をさました。たぶんこの時、神様が「おきて！」と言ってくれたのかと思う。

びょういんについてねようとしたその時、

「ピロリロン。産まれます。速く来てください。」

この音を聞いてとびおきた。そしてお母さんのもとへむかった。弟はもう産まれていた。弟は私の小さいころにそっくりだった。とてもまんまるで真夜中なのにねむいなんて考えるヒマもないくらいかわいかった。

私はしょうらいこんな事をするんだとすこし楽しみになった。私もこんな風に命をつなぎたいな。

「5つの命」

神戸市立東町小学校　五年　森垣　蒼佳

わたしには、3つ上の姉と、1つ下の弟と、6つ下の妹と、9つ下の弟がいます。家ではよく1つ下の弟とけんかします。3つ上の姉ともけんかします。6つ下の妹にイラツキます。9つ下の弟のめんどうをみます。いつも大へんです。母も大へんです。けんかで2回おこります。わたしをおこります。大いそがしです。母は、5つの命を産んで、いま、しあわせなのかなと思います。

わたしは、母の出産に立ちあったことは、ありません。だか

優秀賞（小学生）

ら、産まれるところはみたことないけど、うまれたての赤ちゃんを3人みました。赤ちゃんかわいいなぁて3回おもいました。うまれたての赤ちゃんを3回だっこしました。そのとき、赤ちゃんってどうやってできるんだろうといつも思いました。5年生になって、命の勉強をして、やっと答えが出ました。わたしは、これまで思ってた答えが知れてよかったです。命の感動体験もあって、もっと命の大切さが知れて、よかったと思います。母のたいへんさも知れてよかったです。

わたしは、母のすごさがわかりました。母は、5つの命を産んだことは、すごいんだなと思いました。

わたしも母のように、何人かの命を産んで母みたいにすごくなりたいです。

「生きるためにあるもの」

姫路市立大津小学校　五年　島津　天寧

私は、ふだんの生活をしているとき、「命」のことなんて一つも考えてはいませんでした。

でも、この作文でしっかり考えてみると、私にとって命は、「人生を生きるためにあるもの」です。

理由は、その人生を生きると楽しい思い出、くやしい思い出、苦しい思い出、うれしい思い出…。他の気持ちをたくさん知れるからです。一度、なくしてしまうと、もう二度とないものだから、大切にしないといけないと私は思いました。

でも、ふだんから考えていなかった私なので、今もよく理解することが出来ていません。なので、家族にインタビューしてみることにしました。

最初に、お父さんに聞いてみました。

お父さんにとっての命は、一番自分にとって大切なもの、自分がなによりも一番先に、守らないといけないものだと言っていました。

お姉ちゃんは、命が生まれたり、無くなったりしたら、自分のかんじょうが、とても大きくゆれるぐらい、とてつもなく大きいもの、大切なものだと言っていました。

最後に、お母さんにとっての命は、みんなと同じように、「大事」とも言っていましたが、お母さんだけ、お父さんと、お姉ちゃんとは、全くちがうことが一つありました。

お母さんは、

「命は自分のものだけど、みんなのものでもあるんじゃない?」

と言っていたことです。

私は、家族にインタビューして気づいたのは、自分の命は、みんなの命だと言うことです。

理由は、もちろん自分自身の命だけど、私のお母さんが、自分を生んでくれなければ、今の自分はそんざいしてはいない。でも、だれかのおかげで今、自分が生きることが出来ていると思いました。

そして、いろいろな人とのつながりがあって、生きていると思ったからです。

なので私は、みんなのために、勝手な行動をせず、この大事な人生を、むだなく生きようと強く思いました。それに、初めて「自分の命はみんなの命」と言うことを知って、私は自分以外の命も大切にしなければいけないし、人間だけじゃなく動物や植物にも私は生かされていると感じました。

「命なんていらない!」

とかん単に言ってはいけないと思いました。

私は、これから先みんなの命や自分の命、動物や自然を大切にしたいです。

そして自分の命から次につなげられるように、大切に生きていきたいです。

「いのち」

私立智辯学園和歌山小学校　五年　雑賀　祐丞

今日は、八月十二日です。ぼくは、テレビの番組で、三十四年前の今日、羽田空港を出発した日本航空機が、群馬県おすたか山につい落ちたことについてくわしく知りました。そして、この事故で亡くなった小学三年生の男の子のお母さんが、色々な学校で、「いのちの授業」を、行っていることも知りました。

まず、ぼくは、事故にあってしまった男の子は、どんなにこわくておそろしく思っただろうかと、思いました。野球の試合を甲子園で見たくて、大好きな飛行機に初めて一人で乗って、大阪まで行こうとがん張っていたとテレビで聞きました。ぼくも飛行機が好きです。だから、飛行機に乗る前から、わくわくしていて、乗ってからは、初めてだから、少しきん張したり、これから行く野球の試合のことも考えていたかもしれないなぁと思いました。それからは、どんなにこわい思いをしたかを考

優秀賞（小学生）

えると、ぼくはとてもつらくなりました。きっと、心細くなって、お父さんやお母さん、兄弟にもとても会いたかっただろうなぁと思いました。

他にも、とてもたくさんの人たちが、悲しい思いをしました。事故にあった人たちの家族が、大変な思いで、今まですごくがん張って生きてきたことがよくわかりました。事故から三十四年がたちました。毎年お盆になると、一年ずつたっていきます。飛行機の好きだった男の子のお母さんが、どうしたら亡くなった人たちのためになるかを考えた時、二度とこんなことが、起こらないようにすることと、この事故をわすれないようにすることが大切だと思って、小学校や中学校、高校などで「いのちの授業」をみんなに行っています。そこでは、自分のいのちと、友達のいのちを大切にしてくださいということを、みんなに伝えています。

今、たくさんの事故や事件が多いです。それによって悲しい思いをする人がいます。学校へ行って、みんなと勉強して、ご飯を食べて、おふろに入ってからねるという当たり前と思っているような毎日の生活をすることが、ぼくは、こんなに大切なんだなぁということが、よくわかりました。そしてこの話を聞いて、今までよりももっと、一日一日を大切にするという気持ちを持って毎日を過ごしていきたいと思いました。

「心臓の音」

京都市立紫竹小学校　六年　西浦　心春

私は、7月17日に体験したことを、作文に書きたいと思います。

私は、いつも、朝、おばあちゃんの家に行きます。

なので、17日も、いつもと同じようにおばあちゃんの家に、向かっていました。

少し行った所に、1台の大きな車が、道を通りました。

車が行った後、道には、羽をひかれたすずめが、横にたおれていました。

その時、私は、自転車に乗っていたので、その場で、たちどまり、少し、すずめを見ていました。

「どうしよう」

「たすけたほうが、いいよね。」

「でも、どうやってたすければ、いいのだろう。」

考えていると、バイク2台が通ろうとしています。私は、心の中で、

「おねがい。すずめをひかないで。」

と何度も、何度も、心の中で、さけびました。

運よく、すずめはひかれませんでしたが、今は、朝、通勤時間だったので、これから、たくさんの車やバイクが通るだろう。そう予想しました。

すずめは、あおむけで、もがいていました。

「たすけて」私は、すずめが、そう言っているような気がしました。

頭の中は、真っ白になりました。

目をつむって、しん呼吸しました。

ふと、むかしのきおくが、頭の中にうかんできました。

それは、むかし、おばあちゃんの家で、プールあそびをしていた時、すずめが、プールの中に、ポチャッンと入ってきました。

その日は、とっても、あつい日。すずめも、体があつかったのだろうと思いました。

そばにいた、おじいちゃんが、手ですくって近くの公園のすみに、すずめをおきました。

すずめは、なにもなかったかのように、とんで、行きました。

そのことが、頭にうかんで、その時と同じようにすれば、たすけられるかもしれないと思いました。

いそいで自転車をとめて、安全かくにんし、すずめの近くに行きました。あの時おじいちゃんがやった時みたいに、すずめをもってみました。

さわった時、びっくりしました。小さな体をもった時に、小さな、小さな心臓の音が、きこえたのです。「このすずめは、生きている。」

はじめて、小さな体には、こんなに、感じる心臓の音があったのだと分かりました。

その後は、安全な場所に、すずめをおきました。それから、わたしは自転車にのって、おばあちゃんの家に行きました。

たった、10分くらいのことだったけど、すずめは、生と死の間だった時間だと考えると、とても、神秘的なことだと思いました。

たすけられる命は、これからもたすけたいです。

「『いのち』について」

私立アサンプション国際小学校　六年　川﨑　知怜

今年の五月、大切な家族である犬のハナが天国に旅立ちま

優秀賞（小学生）

した。おじいちゃんの家で飼っている犬だからお休みの日にしか会えないけど、私が生まれてからずっと一緒でした。元気そうな様子で最後に会ったのはゴールデンウィーク。いつもと変わらない様子で一緒に過ごし、

「また来るね。」

と言ってお別れしました。

私が帰って一週間後にご飯を食べても吐くようになり苦しそうに寝ている時間が増えました。病院へ行っても原因が分からず良くなりませんでした。おばあちゃんから大きな病院へ連れて行くと連絡があったので、私もお父さんとお母さんと急いで病院へ行きました。病院で会ったハナは別人でした。本当に苦しそうで舌を出して体をゆらして息をしていました。そのまま入院して検査をする事になりました。この時私は入院したら元気になると思っていました。三日間入院して麻酔して検査したけど原因が分からず、病院で出来るちりょうがなくて、そのまま退院しました。家に戻って三日後、おばあちゃんから連絡があって、私とお母さんは電車に飛び乗って急いで会いに行きました。その時のハナはやせ細り、目が小さくなり、体を弓のように曲げて声をあげて苦しそうに吐いていました。ハナのそんな姿を初めて見て、私は怖くなりました。何にもしてあげる事が出来ずに、ただとなりに座ってなでて話しかけ続けました。次の日、ハナは静かに息を引き取りました。あんなに苦しんでいたのに亡くなった後のハナはいつもと同じで、やさしい可愛い顔でした。まるでねているようで、呼んだら今にも起きてまた一緒に遊べそうでした。

私のお母さんはいつも、

「犬は人間と違って言葉が話せないから痛い・苦しい・つらいが言えない。そして犬の人生は人間より短いから次は会えないかも知れない。だから一緒の時間を大切にしなさい。」

と話していました。私はそれまでハナは私が死ぬまで生きてくれると思っていました。ハナが亡くなって、この言葉の本当の意味が分かりました。最後に元気で会った時、もしかしたら私に「苦しい、痛い、助けて」

と言っていたのかも知れません。気づいてあげられなかった事がとてもくやしいです。ハナが居なくなったおじいちゃんの家はとても寂しいです。

ハナは苦しみながらも、最後まで一生懸命生きる姿を私に見せてくれました。だから私もつらかったり、苦しかったりする事があってもあきらめずに必死でやって見ようと思います。ハナの死を経験して後悔なく生きる事が大切で一番難しい事だと気付きました。

「自然の『いのち』」

神戸市立成徳小学校　六年　尾川　琳音

私は、木々や虫、動物たちに「いのち」を感じます。

彼らは、生きること、未来に命をつなげることに「いのち」をかけ、逆境に立ち向かう力強さをもちながら、ちょっとさわったらこわれてしまうガラス細工のように、せんさいな弱さをもちあわせています。私はそんな神秘的な彼らを、美しくいとおしい、かけがえのないものとして尊重しています。

しかし、そんな思いをもっていても、自然の破壊を報じるニュースなどは途絶えることがありません。道具を手にした人間相手では、なす術のないひ弱な存在なのが自然で、その尊さに気付かないのが人間だからです。私はこんな報道を見るたび、胸がしめつけられるような思いになり、もっと自然を、命を、助けなければ、生かさなければという思いにかられます。

くしくも、自然の「いのち」がこわされたという報道から、私は「いのち」を感じます。そして、理不尽にも人間に破壊され続けているにもかかわらず、けん命に生きのびようとするけなげな生き物たちは、何にもまして力強く、勇かんであると思います。

また、私は、種族のために生きる彼ら、つまり生き物が、「いのち」あるもののために生きてくれている、そうでなくても、結果として、つくしてくれているように思えてなりません。もちろん、農作物をあらしたりする点で見れば害獣や害虫もいるでしょう。しかし、例えば、人をおそうかもしれないクマが、農作物をあらすシカを食べる。このようにもちつもたれつの関係をたもってこそ、「いのち」の関係も機能するのではないかと思います。だから、一方的に殺す、支配するとしてしまえば、自然がくずれていくのは、あたりまえなのではないでしょうか。

このように、自然がくずれていくことから分かるように、「いのち」とは、人間もふくめた様々な生命が、深くせんさいに関わりあう中で、生き物たちが全てをかけてようやく生まれる、まぎれもない「きせき」だと私は思います。

「初めてのペット」

神戸市立成徳小学校　六年　佐藤　妃夏

命とは「長くて短いもの」だと思う。

私は、2年ほど前に初めてペットを飼った。とても小さなハムスターだ。少しさわってみると、とても温かかった。私はお母さんと3つの約束をした。かわいがってあげること、世話をちゃんとすること、いつか別れが来るのを頭に入れておくことの3つだ。ハムスターの寿命は1～3年。2年でも長生きな方だ。私と姉はいろんなことを調べてたくさん世話をした。でも、どんどんサボるようになった。世話をするのがつかれたのだ。ハムスターが出してほしそうにしてても無視することもあった。

ある日、ハムスターの耳がはれてることに気が付いた。今までもけがはしていたが、すぐに治っていた。すぐに病院につれて行った。すると獣医さんに「傷口から菌が入ったんでしょう。手術で治すことができますがこのハムスターはお年寄りなので手術はむりでしょう。」と言われ、薬をわたされた。弱ったハムスターを見てお母さんが「もうダメかもね。」と私と姉に言った。ショックでみとめたくなかったがみとめるしかなかった。それからずっとそのハムスターをいつも以上に大切にした。そして数週間後、ハムスターは動かなくなっていた。悲しくて辛くて、後悔した。もっとかわいがってあげたらよかったと心から思った。

ハムスターは2年、生きた。長かったはずの2年があっという間に感じた。

このようなことから私は、命とは「長くて短いもの」だと思っている。これからの人生後悔のないように生きたい。

「自分」

神戸市立成徳小学校　六年　髙橋　りお

私の命ってなんだろう。

私は時々そう思う。低学年の時は、命についてなんてそう考えることは無かったし、身近に命についてふれる機会なんていうのはもっと無かったから、命の大切さや命の尊さなんて頭に入れずにすごしていた。

それは久びさに祖母の家にいったある日のこと。祖母は読書が好きだったため、家には大きな本棚があった。私も暇な時は、よくその本棚をあさって、気になった本を読んでいた。その日も本棚をあさっていたら、大きくて薄い水色の本らしき物があった。あきらかに、本屋なんかで売っている本じゃない。気になった私は祖母にこの本(?)は何だときいてみた。すると祖母は、「あぁ、それりおのひいおじいちゃんがかいた本やったと思うで。」と答えた。ひいおじいちゃんがかいた本?私は「六〇一翼よ!私の青春転戦之記」とかかれたその本のページをめくった。

どれほど読みふけっていたのだろう。気がつくと、もう窓から西日が差していた。私はたくさんの事が次々と頭に入ってきていて、本から目を離した今も心がまだ興奮していた。「まさか。」「そんな。」「そうだったのか。」がいっぱいつまった本だった。内容は、曽祖父が戦場でリアルに体験したことや、兵たちの厳しい現実が、こと細かにえがかれていた。私は、今までも戦争の恐ろしさや辛さがかかれた本を読んだことはあったけど、その本とはくらべものにならないくらいにリアルだった。あくまで、この本で曽祖父が言っていたことだが、実は兵たちがかいた戦争の本というのは、ほとんど兵の中でも位の高い人達がかいているらしい。別に私の曽祖父は、戦争の時には実際に銃を持って戦ったわけでなく、船で洋菓子をつくるパティシェールとして働いていたらしい。それでも、兵として戦う訓練場のようなところには、仲間と一緒に行っていた、というか行かされていたらしい。船が攻撃を受けた時は、曽祖父は奇跡的に助かったらしいが、仲間の死体と血でそまった海を曽祖父は、必死で逃げたという。

私は、その日を境に命について考えることが、うんと増えた。今年の読書感想文には、この本のことをかく。それに、曽祖父が本当に後世に伝えたかったことを考えて、自分の命を何よりも大切にして生きていこうと思う。

自分ってなんだろう。

私の命ってなんだろう。

「思い出のいちょうの木」

神戸市立成徳小学校　六年　指野　詩

私はそのとき三年生でした。南校舎は古い建物でした。私は当時、南校舎の二階の教室で学んでいました。校舎は古かったので、夏はとても暑いのです。クーラーがなかったからです。でもそんな三年四組を暑さから守ってくれているのがいちょうの木です。いちょうの木は校舎の裏側に立っていました。いちょうの木は、ちょうど三年四組の教室を守るように立ってい

るのです。はじめてこの教室に入って来たときは、いちょうの木があることを知りませんでした。でも、あるとき、私の担任の先生（吉田先生）がいちょうの木のことを話しました。私はそのときはじめていちょうの木のことを知りました。いちょうの木を知ってから、いちょうの木とたくさん遊ぶようになりました。図工の時間にはみんなで外に出て、木の形を紙とクレヨンでかきとる作業をしました。紙を木にあて、その上から茶色のクレヨンでなぞって木の形をとります。それから、いちょうの木の裏にかくれてかくれんぼをして遊んだり、木のぼりをして遊んだりしました。ときには、さびしいときは、いちょうの木のそばに行って葉の様子を見ます。秋になれば葉が黄色に色づきます。みんなでいちょうの観察もしていました。この一年間は、ずっといちょうの木といっしょでした。とっても楽しい日々があっという間に消え去っていきました。そして私は四年生になりました。四年生になってからあまりいちょうの木と遊ぶことがなくなりました。五年生になると、じゅくへ行ったり習い事が大変になっていきました。六年生になると、外で遊ぶこともなくなってしまいました。私が、いちょうの木を忘れかけたころ、南校舎を新しく建てかえることになりました。私はどんどんこわされていく思い出の校舎をながめていました。すると、ショベルカーがいちょうの木を切りたおそうとしていました。そのときはとっても悲しかったです。たくさん遊んだいちょうの木がどんどん引っぱられています。私はいちょうの木との思い出をたくさん思い出しました。工事は終わりました。思い出の校舎と思い出のいちょうの木が、あとかたもなく消えてしまっていたのです。私は、せめて最後に、いちょうの木に感謝を伝えたかった気持ちでいっぱいです。暑いなか、がんばって私を暑さから守ってくれたいちょうの木に「ありがとう」を伝えたかったです。私はそのときはじめて命が亡くなるということが、どんなにつらいことなのかを知りました。でも、本当に楽しかった日々を、私はいつまでも忘れません。いちょうの木、本当にありがとう。

「命とは」

私立智辯学園和歌山小学校　六年　高橋　諒丞

命って何なのだろう。この前学校の授業で命について助産師さんのお話を聞いた。はじめに、友達や先生の心音を聞かせてもらった。「ドクン、ドクン」という音が、まさに生きているということを表しているかのようだった。確かに心臓が動いているというのは生きている証拠だけれども、それでは命というのは心臓のことなのだろうか。いや、心臓は体の臓器のうちの一つであるだけだ。

ぼくたちは、命があるから生きている。臓器は生命を維持するための道具であるに過ぎない。では命はどこにあるのだろうか。

ぼくは、命とは今生きている時間のことではないかと思う。命があるからこそ、今生きているこの時間を過ごすことができる。死んでしまえば、その時間を失ってしまう。

時間は皆に平等に与えられている。その時間を有効に使うか否かは本人次第である。助産師さんは最後に出産シーンのDVDを見せて下さった。ぼくのお母さんも、こんなに苦しい思いをしてぼくを産んでくれたのかと思った。ぼくは命を無駄にしてはいけないと思った。そのために、時間を無駄にせず、有意義なものにしなければならない。

生きていれば、老い、病になり、必ず最後には死が訪れる。そのとき、幸せな人生だったと思える生き方をしたいものだ。

「かけがえのない大切なもの」

私立智辯学園和歌山小学校　六年　矢田　恵士

部屋の窓から夜空を見ると、今夜は月や星がとてもきれいに見えた。

ぼく達の銀河系には、約二千億個の星があるらしい。今、この地球上に自分と同じ時を生きている人間は、約七十二億人いて、あの星のまたたきのように、生まれては、亡くなってゆく人達がいる。宇宙の時間からみると人間の一生は長く生きても百年だなんて、星のまたたきより短いかもしれない。先日、ぼくは助産師の方の授業で色んな偶然が重なって、一つの命の誕生が、あることを知ると今、自分が、ここで、こうして生きていることさえ「きせき」だと思っている。

最近のニュースではたった一つしかない命が、いとも簡単に、なくなってしまう悲しい出来事ばかりで、胸がつぶれそうになる。

だから、ぼくはなぜ生まれてきたのだろうなんて絶対考えない。なぜなら、今、生きていることが、とても大切だと思うし、考えても答えがでてこないことに時間を使っているひまがないと思うからです。自分の意志ではなく何か、わからない力で生かされているような気がする。限りのある命の中で生かされている間は、自分に何が出来るのか、一分一秒を無駄に

しないで、一生けん命自分を大事にして生きることだと思う。それと同時に周りの家族、友人、世界中の七十二億人の一人一人の命も、とても大切なものだから、その事を忘れず、もし、自分が医者になる事が出来たら、大切な命を守るのに全力を尽くして行こうと考えている。

「生き物の命を大切にするということは」

守山市立守山中学校　一年　谷口　結帆

私は、何度か蚕を育てたことがあります。この夏も二か月半、蚕の世話をしました。幼虫のころは白くてふわふわした新幹線のような姿をしていて、桑の葉をたくさん食べます。食べる量が多いため、すぐフンもたまります。脱皮をくり返して、みるみるうちに一か月で二ミリ程度から七センチくらいの大きさに成長しました。毎日桑の葉をさくさく食べ続ける音が夜中も休まずひびいていました。やがて口からはいた糸でまゆをつくり、さなぎになります。二日間で真っ白いまゆが完成し、この糸は体のどこからきたのかと不思議な気持ちになります。まゆの中に姿がみえなくなっても、中で糸をはいて動く音がプチン、プチン、ときこえてきます。それから二週間後まゆから出てくるころには、がのような真っ白い成虫に羽化しています。いつも前足で触角をなでていて、大きな黒い瞳がすごくかわいらしいです。メスの産む卵は五百個、おなかの中は卵でパンパンにつまっていて、短い足でおなかを引きずって歩いていました。成虫は水も飲まず食べ物も食べず、ただ子孫を残すのみで死んでゆきました。蚕の一生はとても短いけれど、幼虫が無心に葉を食べたり、オスがメスにむかって必死にアピールしているのを見ると、一生懸命生きているのがひしひしと伝わってきました。

養蚕業は、蚕のまゆから絹糸をとりつむぐ、古くからの産業です。成虫がまゆの中から出てくる前に、さなぎのまま蚕ごと、熱湯で死なせてしまうことになります。そのことを知ったとき、私は単純に「かわいそう」と思いました。蚕は絹糸のために人間に利用される運命なのか、と疑問に感じました。蚕は長い時の中で野生を失った家畜で、自然界では生きていけません。蚕の世話をしていると、蚕が小さなアリにちくっとさされてのたうちまわることがあり、弱い生物であることをつよく感じました。人間は蚕を守り育て、蚕から絹をいただく、そんな蚕に、私は「かわいそう」ではなく、むしろ「ありがとう」と感謝しなければと思っています。

蚕に限らず、人間は、他の生き物の命を利用して生活していることがたくさんあります。他の動物を食肉として食べることもそうです。最近、日本が商業捕鯨を再開したというニュースがありました。乱かくによって減っていく鯨の種もある中で、鯨をとることに反対する反捕鯨派、伝統や文化、仕事を守る、逆に増えすぎた種の鯨の数を調整するために捕鯨を進める捕鯨派と、意見が対立しています。

私は、捕鯨をしてもいいのではないかな、と思います。昔から続けている漁師さんの仕事をうばってしまうし、文化も失われるし、鯨は他の魚を食べる量が一番多いので、増えすぎるとかえって海の生態系がくずれてしまうのでは、と不安に感じるからです。鯨のとる数をきめて漁をすれば、増えすぎることも減りすぎることもなくなると思います。けれども、鯨の数を数えるのは大変なため、くわしい頭数は知られていないそうです。でも、そもそも数の問題ではなく、必要のない捕鯨ならするべきではないとも思います。

いろんな生き物の命をうばってしまう人間ですが、いっそ人間がいなければいいのでしょうか。しかし、人間と生き物たちは何万年も前から共存してきた仲間です。お互いに影響を与えあうことは、共生していくうえでさけられません。だからそれは常に忘れてはならないことだと思います。

人間は唯一、他の生き物を守ることができる生き物です。人間が環境のことも配りょしながら、生態系を守っていくことが、大切だと思います。私は、蚕や捕鯨のことを考え、命の重みや命の大切さを改めて感じました。しかし、まだ解決策が見出せない自然環境の問題はいくつもあります。私は、いろいろな問題についてもっと知識を深め、これからも考え続けていきたいと思います。

「家族や友達の支えによって、こころが救われた体験」

大阪市立長吉西中学校　一年　西宮　綾乃

私は、平成十八年十二月二十一日に生まれました。体重は三千四百十グラム、身長五十センチメートル。とても健康に生まれました。大きな病気をすることなく幼稚園、小学校と成長していきました。友だちも多く楽しく毎日を過ごしていました。

ですが、小学校四年生になってすぐ、学校に行きづらくなりました。理由はいまだにわかりませんが、家を出ようとすると足が動かなくなったり、涙があふれ出たりしました。

そんな時に私を助けてくれたのが家族や友だち、保健室の先

優秀賞（中学生）

生や習い事の先生方でした。私が家を出る時に泣いていたりすると家族は無理に行かせようとせず学校に相談してくれました。すると、教室に入りづらいのなら保健室に行ってみたらどうかと言われました。私は、保健室になら行けるかもと思い、家を出ることができました。母も毎日私に付き添ってくれ、何とか学校に入ることができました。保健室に着くと、先生が私の話を優しく、聞いてくれたり、色々な話をしてくれたりしました。その日は少し話をして帰りましたが次の日もまた次の日も私は毎日保健室に登校します。その時、先生は私と一緒に折り紙を折ってくれたり、校内を散歩したりしてくれました。学習園に咲いている花のお話を聞かせてくれたり、おすすめの本を教えてくれたりして、ずっと私のそばで私を支えてくださいました。私は教室には入れずいつも保健室にいたので、時々友だちが会いに来てくれました。毎回、一緒に教室に行こう、と声をかけてくれたのですがやっぱり行けませんでした。また、私が習っていた公文の先生は、「先生もそんな時期があった、仕事に行きづらい時期があったよ。」と私をはげましてくれたり、水泳のコーチは、プールサイドまで一緒に来てくれたり、練習の時も私を気にかけてくださったりしました。

そして、四年生の二学期には少しずつ教室に行けるようになり、みんなと同じように登校できるようになりました。

その後、五年、六年では、運動会の応援団に入団し、委員会活動では、健康委員に入り、六年の時に委員長を務め、ガラリと変わった私のことを先生方はとても喜んでくださいました。

現在は、新しい友達も増えて、部活もしていて、新しい環境でとても楽しく過ごしています。

私はこの経験を通して、自分は一人じゃない、自分はたくさんの人に支えられて生きているということをとても実感しました。これからは自分も誰かのこころの支えになれるような人になりたいです。

「命の記憶」

私立滝川第二中学校　一年　中村　桜雪

私の両親は獣医だ。

常に命と向き合う事を職とする両親の娘として生まれた私の幼い頃の記憶の一つに忘れてはいけない大切な物がある。

帝王切開の記憶だ。

当時、まだ四歳だった私は渡された産まれてまもない子犬をひたすらさすった。

声をだして鳴けば無事呼吸ができたという証拠。

だが、私がどれだけさすっても鳴き声どころか子犬の体温が低くなっている気がして怖くてたまらなかったのを覚えている。

だからこそ、子犬が小さくか細い声で鳴いた時は本当に幸せだった。

自分の手で救った命のぬくもりを肌に感じた大切な記憶。

その記憶をあたえてくれたのは両親だ。

できる限りの方法で命を救おうと日々奮闘する両親だが、それでも全てを救えるわけではない。

出会いと別れの中で日々私に「命の記憶」を両親は与えてくれた。

そうやって必死に働く両親の様に命を救うことを職とする人がいると同時に世界には自分の飼っている命を捨てる人もいる。

命の重みを理解せずむやみに放りなげる命の数が年々ふえてきていることをしっているだろうか。

よく犬や猫の命を「小さい命」と呼ぶ時がある。

でも私はちがうと思う。

命に大きいも小さいもないはずだ。

みんなかかえる命は平等に分けられ今を刻む大切な宝物である。

それを「飼えなくなった」など、自分勝手な理由で捨てるなどあってはならない。

共に暮らす大切な家族ならば最期の一秒まで見守ることが義務だと思う。

私の家にも犬や猫がいる。それまでにもたくさんの動物をかってきた。

たくさんの命とふれあってきたからこそわかる、「命を捨てる」むごさ。

私は今の家族が大好きだ。

両親も、自分も、大切なペットも何一つ欠けてはならない宝物であり「命の記憶」を刻むパートナーだ。

私は今ありがとうと伝えたい。

自分をうんでくれた両親に、いつも側によりそってくれるペットに。

命の記憶をありがとう。

「小さくても大きな命」

私立滝川第二中学校　一年　堀田　絢馨

私は、一人っ子で弟や妹がいません。ですから、新しい命が生まれる瞬間を見たことが無く、ペットを飼ったことも無いのでこの作文を書くことに少し苦戦しています。ですが、日々の生活の

優秀賞（中学生）

中で「いのち」について感じたことを述べたいと思います。

これは、私が小学校六年生の授業のことです。「いのちについて考えよう」ということで、赤ちゃんや妊婦さんと触れ合う体験をしました。私は一歳ぐらいの女の子と触れ合ったのですが、とてもかわいらしくて今すぐにでも妹にしたいくらいでした。当たり前のことですが、まだ幼いのではっきりと言葉もしゃべれないし、おもちゃを口の中に入れてしまったりすることがありました。そして、その女の子をだっこさせてもらいました。心臓の「トクトク」という鼓動が伝わってき、体は小さいのにずっしりとくる重たさ、予想外の温かさにびっくりしました。その時私は、赤ちゃんから「命」の重さを教えてもらったように思いました。次に妊婦さんと触れ合いました。妊婦さんのお腹を触らせてもらうという体験で、思ってたよりも固く張っているような感じで驚きました。どんな子に育つのかワクワクしながらも、元気に産まれてきてほしいなと思いました。

二月になり、卒業式練習をしていたところその時の妊婦さんが、

「無事に産まれました。」

と、産まれた赤ちゃんと一緒に来て下さいました。体育館中が拍手の音でいっぱいになりました。そこで、卒業式でも歌う「いのちの歌」を歌うことになりました。元妊婦さんが涙を流しながら一生懸命聴いて下さったので、私は嬉しくてすてきだなぁと思いました。赤ちゃんを産み、育てることは大変だけれど、そうやって新しい命が芽生えて次の世代へと受け継がれてゆくのです。

自分もこの命を持って、将来社会へとけこんでいきます。そんな時、たとえつらかったり悲しい事があっても自分の命を大切に、そして他の人の命も大切にできる大人になりたいです。このかけがえのない命が産まれてきたことに「ありがとう」という感謝、そして心の温かさを持って、将来立派な大人になりたいと思った体験でした。この体験によって私は、命の大切さに改めて気づかされ、自分の将来についても考えることができました。

見た目は小さくても大きな命。それは、かけがえのないたった一つの大切な命なのです。

「命の順位」

尼崎市立小園中学校　一年　田中　梓彩

私の妹は象が大好きです。この前も、王子動物園に行き、家族で象を見ました。妹は大興奮していました。大きくてゆっくり動く姿の象を見ると、私もゆっくりおだやかな気持ちになります。いつも時間がたつのを忘れてずっと見てしまいます。

エサをやり終えた飼育員さんに声をかけられました。

「知ってる?動物園とは平和な国しかないんだよ。」

私は今までそんなこと考えたことも思ったこともありませんでした。今まで動物園は、どこの国でも、普通にあると思っていたので、飼育員さんの言葉は、とても心に残りました。

帰りの電車の中で父が、教えてくれました。

「昔、日本が戦争していた時、トラやライオンなどの猛獣たちや、キリンや象など大型の動物たちは毒殺するようにと国から命令されたんだよ。」

私は初めて聞いた話だったのでビックリしました。さらにおどろいたのは、次の言葉でした。

「毒殺するために動物園の飼育員さんたちは、エサのイモや果物に毒を混ぜて殺す仕事をさせられていたんだよ。」

何もかも初めて聞いた話でした。妹は、

「かわいそう!ひどい。」と言っていましたが私はあまりのショックで声がでませんでした。

父が小学校の国語の教科書に載っていた話で「かわいそうな象」という有名な話で、第二次世界大戦中に東京の上野動物園で実際にあった話だそうです。

もし、空爆でおりがこわれて動物たちがにげ出し人を襲ったりしたら町中パニックになり、大変な事態になると思う。その他に戦時中の食料が不足している時に動物にあたえるエサがなくなり、動物たちはみんな餓死してしまうでしょう。そう考えると、にげ出した動物を銃で射殺するよりも、また、おなかをすかして衰弱死させるより、せめて大好物のエサをおなかいっぱい食べさせてあげたいと思う飼育員さんの気持ちもわかります。たとえそのエサに毒が入っていることを知っていても…。これは人間にとって究極の選択です。動物の命か、人間の命、どちらかを選ぶかの問題の答えは無い。それが今の私の答えです。

命を選択させる戦争や争いごとは絶対におきてはならないのです。

世界中で争いごとがおきている。その地域の人々は日々命の選択をせまられている。私たち日本では二度と戦争がおこらないようにしなければならないという思いが強くなった出来事でした。

優秀賞（中学生）

「さくらももこ先生が残してくれた言葉」

尼崎市立小園中学校　一年　旗手　麻衣

昨年の八月、漫画家のさくらももこ先生が五十三才で亡くなられた。私はアニメちびまるこちゃんの作者ということぐらいしか知らないが、母は小さい頃からずっとファンでアニメも好きだが同じくらいエッセイが好きでよく読んでいたようだ。それでまるで身内の誰かが亡くなったかのように落ちこんでいたのを昨日のことのように覚えている。

今回、命をテーマにした作文を書くと伝えた時、たぶん私を妊娠した時のことや、出産までのことを話すのだろうなぁと予想していた。しかし私の予想は見事に外れ、母は自分の本だなにあった一冊の本を持ってきた。それはさくらももこ先生のエッセイ「たいのおかしら」だった。

全て読み終えてから、一番印象に残ったのは、「小杉のばばあ」という話と「ミーコの話」だ。共通点は最後は死ぬということだった。さくら先生は「死」についてこう言っている。

「死ぬということはいなくなる。そういう事なのだ。私もいつかいなくなる。あと五十年後かもしれないし、もっと早いかもしれない。死ぬ可能性は次の瞬間にある。今生きている事はあたり前ではなく、可能性の高い偶然にすぎない。誰もが生きている時間は生きている間だけしかない。死ぬ可能性を含む生きている時間を、私は本当に貴重だと思う。」

私は、はっとした。今、生きていることは当たり前ではないのだ。私にそう思わせてくれたのは二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災を思い出したからだ。

死者、行方不明者合わせて一万八千人を超えた。亡くなられた方も当日は会社へ行ったり、学校へ行ったりと、昨日と何ら変わらない日常を送っていたはずだ。当たり前のようにご飯を食べ、仕事をしたり勉強をしたりしていただろう。誰が今日、死ぬなどということを予想しただろうか。当時の私は四才で幼稚園児だった。給食を食べ、帰りの支たくをしていたと思う。突然大きな揺れを感じ、先生に急いでと言われ、ろうかをものすごいスピードで走り安全な場所に避難した。まだ四才だった私だが、そのことだけは鮮明に覚えている。小学生になるとどれだけ怖い地震だったか分かるようになった。毎年テレビで放送される追悼式を見ると、今も涙が出そうになる。私は、たまたま関西に住んでいたから助かったのだ。もし、東北に住んでいたら津波によって死んでいたかもしれない。今の私にできることは、亡くなられた方が叶えられなかった夢を叶えること、そして震災を風化させない取り組みをすることだ。

今回、さくら先生の本を読んで、改めて命について考えさせられた。人間いつかは死ぬのを分かっている。でもいつもよりも、こうやって毎日楽しく元気に暮らせていることは本当に奇跡のようなことだと認識した。生きているのは当たり前ではなく、可能性の高い偶然にすぎないのだ。私は死なないかもしれないが、父母はもしかしたら明日死んでしまうかもしれないのだ。そう考えると、あとどれぐらい生きている時間が残されているか誰にも分からないけれど、家族や友達との時間もとても大切なものだと思った。

ネットで、さくら先生の死の原因は乳ガンだと知った。十年近く闘病していたらしい。こんなにも長い間、どんな気持ちで、いつ死ぬか分からない状況の中で、私達を楽しませ、元気にしてくれる漫画やエッセイを書き続けてきたのだろうか。そこにはさくら先生の残してくれた言葉、「死ぬ可能性を含む生きている時間は、本当に貴重」だったから私達の心に残る作品を作り続けてきたのではないかと思う。

「天国にいるさくら先生へ、先生の本を読まなければ、生きるということを当たり前に感じていました。私は先生が残してくれた作品や言葉を胸に生きる大切さをいろんな人に伝えていきたいです。ありがとうございました。」

「僕の命、家族の命、つながる命」

私立関西学院千里国際中等部　二年　村上　スミス　海

命について考える時、僕はいつも自分と家族の命のつながりを強く感じる。僕の命は自分のものでもあるが、この命は両親から受け継いだものでもあり、祖父母や御先祖様とつながっている。人は人生において生と死を、家族や親戚など親しい人を通して経験し、それぞれの命の意味を考える機会を与えられるのだと思う。

僕が生まれるずっと前に、母方の祖父は食道がんでこの世を去った。僕の母と父がまだ結婚する前だったが、母は病床の祖父の元に父を連れて行ったそうだ。祖父は死を前にして、のちに娘の人生の伴侶となる人に会うことができ、安心して天国へ旅立ったに違いない。曲がったことが嫌いで真っ直ぐに生きてきた祖父が五十四才の若さで亡くなってしまった寿命の意味は、考えれば考えるほど、僕には答えが見つからない。

僕が生まれる十年前には、母の子宮にがんが見つかった。様々な偶然が重なり、幸運にも母は子宮を残したままがん

優秀賞（中学生）

を克服した。そのお陰で、のちに姉と僕がこの世に生まれることができた。もしもがんの発見が遅かったら、母は子どもを産むことはできなかっただろうし、自身の命さえも落としていたかもしれない。母ががんを克服した意味は、姉と僕に命のバトンを渡すことだったに違いない。

僕が母のお腹の中にいた年の四月に、僕の母方の曽祖母が亡くなった。僕はその二ヶ月後に生まれた。そして同じ年の十二月には祖母にがんが見つかった。たった数ヶ月の間に身近な人の生と死を立て続けに目の当たりにした祖母は、当初は混乱し自身の病を悲観したそうだ。しかし、そんな頃に生後六ヶ月の生命力に満ちあふれた僕を見た祖母は「この子が歩けるようになる姿を見たい。この子が話すようになる姿を見たい。」と強く思い、赤ちゃんだった僕から生きる力をもらったそうだ。僕がこの世に生まれてきた意味は、病に負けず前を向くことを祖母に伝えることだったのかもしれない。

つい先週には、僕の大叔母が急逝した。毎年お正月を共に過ごし元気だった大叔母は、先月、末期がんと診断されてからたったの一ヶ月で、あっけなく逝ってしまった。あまりに急だったため、僕はこれまでお世話になった感謝の気持ちや別れの言葉を直接伝えることができなかった。当たり前に思いがちな大切な人との日常は、ある日突然終わってしまうこともある。だからこそ、身近にいる大切な人には日頃から感謝の気持ちを伝えるべきだということ、それが大叔母の急な死が僕に教えてくれたことだ。

命は尊くて、儚い。そして人それぞれの寿命は、時に不公平でもある。二〇十七年に百五才で亡くなった医師の日野原重明先生の著書「十歳のきみへ」の中で、日野原先生は寿命について興味深い表現で書いている。「わたしがイメージする寿命とは、手持ち時間をけずっていくというのとはまるで反対に、寿命という大きなからっぽのうつわの中に、せいいっぱい生きた一瞬一瞬をつめこんでいくイメージ。」僕は以前この本を読んだ時に、日野原先生の引き算ではなく足し算による寿命のとらえ方に大変感銘を受けたことを鮮明に覚えている。止まることなく常に流れる時間の中で、日野原先生のように一瞬一瞬に命を注ぎ込むことは決して簡単なことではないかもしれないが、僕は足し算の寿命を目標にしたいと思う。十四年前の僕は、生まれただけで祖母に生きる力を与えることができたが、これからの僕は曽祖母、祖母、母から託された大切な命のバトンを握りしめながら、自分の命に意味を持たせ輝かせられるよう走り続けたい。

「命を大切にするってどういうこと？」

私立滝川第二中学校　二年　尾形　彩葉

私は常日頃、不思議に思っていることがある。それは、なぜ皆が命を大切にしようと口をそろえて言うのか、ということである。なぜだろう。命が一つしかない物であるからだろうか。それは違うと思った。なぜなら世界に一つしかないものは他にもたくさんあるからである。例えば、世界遺産の建造物や私達が普段から見ている何気ない風景。これらも世界に一つしかないものだ。世界遺産はともかく、自分の周りの風景を「命と同じくらい大事だ。」と考える人はおそらくいないだろう。

ロールプレイングゲームの戦い方ですら、「いのちだいじに」と表示されている。遊びであるゲーム内ですら命が大事であると主張されている。

これほどまでにいろいろな場面で皆から大事にしようと言われる”命“とは、そもそも何だろうか。

まず私は体の中で命と呼べそうなものを探すことにしてみた。

最初に命と言われて思いついたのは心臓であった。しかしこの臓器に心臓という名前がついているのであれば、イコール命ではないだろうと考えた。次に思いつくのは脳であった。ところが脳死という状態では、命がなくなったとは考えない人もいる。このことから、脳も命とイコールではないのであろう。そうなると、体の中に命と呼べるような臓器は他になさそうだ。

体の中に命と呼べるようなものがないとすると、一体どこにあるのだろうか。様々な文献を調べていくうちに、聖路加国際病院の日野原重明先生の「命の大切さ」という文章をみつけた。そこには、「心臓は命を保つために動いているのであって命ではない。命とは自分でどうにでも使える自分が持っている時間である。」と書かれていた。命が時間であるならば、心臓止まったり脳が正常に働かなくなってしまうことによってその人の時間が止まってしまう＝命がなくなるということが簡単に納得することができた。

私はたくさんの時間をすごしてきた。例えば、家族とすごす時間・友達とすごす時間・一人ですごす時間。これらの時間は私にとって、とても大切でかけがえのないものである。そのような時間を大切にするということは、命を大切にすることでもある。人と一緒にいる時間や自分一人ですごす時間を一秒一秒大切にするということは命を有意義に使っていくということな

のだ。

世界にはたった一つしかない建造物や風景などがたくさんある。けれどそれらのものは、今の技術で同じ物や似たような物が作りだせるかもしれない。しかし、自分が持つ特別な時間である命は作りだすことは絶対に出来ないのだ。

これからすごすであろう、家族や友達との時間・一人でゆっくりする時間、これらのものを自分でどうにでも使える自分の時間で楽しく、悔いの残らないようにするためにも、私は命を大切にしていきたいと思う。

「命のバトンタッチ」

私立滝川第二中学校　二年　坂西　珠季

「いのち」という言葉を聞いて一番最初に思い浮かべたのは、祖母の姿でした。

私の祖母は今から十四年前、五十六歳の時に癌で亡くなりました。その時私は生後二ヶ月で、話すどころか歩くことさえ出来ない赤ちゃんでした。祖母と過ごした時間はわずか二ヶ月。私は祖母の顔や声を覚えておらず、全て写真やビデオで知りました。そのため、祖母に関することはよく知りませんでした。そんな私に最近起こった不思議な出来事と、祖母と私を繋いだ大切な言葉について書いていこうと思います。

私が中学二年生になってからのことです。中学校という新しい環境には慣れてきたものの、その次に待っていたのは人間関係の難しさでした。親しくなったから見えてきた、友達の苦手な所。小学生の時とは違う難しさに、私はとても悩みました。

ある日、そのつらさに耐えきれなくなってしまった私はどうしても学校に行けませんでした。体調が悪い時とは、違う苦しさに、朝からたくさん泣きました。こんなことが初めてだった私は、止めたくても次々に溢れ出てくる涙に驚きました。しばらくして涙が少し落ち着いてきたころ、不思議なことが起こりました。なぜかふと、祖母の姿が頭に浮かんだのです。理由は分からなかったけど少し気になり、母と祖母のことを話しました。「どんな人だったのか」や、「もっと一緒に過ごしてみたかった」などという私の願いについても話しました。するとまた、涙が頬を伝いました。それはさっきのような悲しみの涙とは違い、私を落ち着かせてくれる涙でした。それから自然に涙は止まり、さっきまでのつらさや苦しむ気持ちはもうどこにもありませんでした。それだけでなく、「さあ明日はどうしよう、どう頑張ろう」という前向きな気持ちまで出てきたのです。前向きに考えるのが苦手なはずなのに、祖母のことを考えると自然に前を向いているのです。どうしてなのか私は考えました。すると一つ、考えが浮かびました。それは、「祖母が私を助けようとしてくれたのではないか」というものです。普通ならありえないことですが、この考えしか思い浮かびませんでした。でも新たな疑問が浮かびました。もしそうだとしたらなぜ、二ヶ月しか一緒に過ごしていない私を、祖母は助けてくれたのか。これについては全く分からず、母にこの出来事を話してみました。すると、

「バーバは、珠季のことをとても大切にしていたよ。」

と言われました。祖母は私が生まれた時、体が弱っていたにも関わらず、母が退院するより前に会いに来てくれたり、母が買い物に行くときは一生懸命お世話をしてくれたりと、本当に大事にしてくれていたのだと知りました。そんな祖母が、亡くなる前に私に書いてくれた手紙には、

「バーバは珠季ちゃんと、いのちのバトンタッチが出来て、うれしいです。」

と書かれてありました。「自分は死んでしまうけれど、あなたにいのちを繋ぐことができた」という喜びを、祖母は「いのちのバトンタッチ」という言葉で表し、私に贈ってくれました。この言葉は私の大切な宝物になり、それをくれた祖母も、私にとって大事な大事な存在になりました。祖母も私も、お互いのことをよく知っていた訳でも、たくさん話をした訳でもありません。ただただ、相手のことを大切に想っていました。その「想い」が届いたから、祖母が私を助けてくれたのだ、そう思いました。

「命が消える時」。それが誰にも分からない状態で人はみんな生きています。その中で、

「命のバトンタッチ」

という素晴らしい体験をさせてもらった私は、本当に幸せだなと感じます。私に生きる力をくれたこの奇跡に、感謝しようと思います。

「バーバ、一生懸命生きるよ。」

「新しい命」

神戸市立本山南中学校　二年　法田　芹羽

「妹できるよ。」

小学校2年生のとき、母に言われた。言われてすぐはよく分からなかったけど、素直にうれしかった。その日から新しい命が生まれるまでたくさんのことがあった。母にはとても気をつかうようになった。買い物にでるときは荷物を持ち、母がし

優秀賞（中学生）

んどそうだったら家事の手伝いをしたりなど、以前はやらなかったことをするようになった。日に日に大きくなる母のお腹を見るとワクワクドキドキした。その反面すこし不安もあった。自分は妹の世話ができるのか。元気に生まれてきてくれるのか。とても不安だった。そして、約10ヶ月がたち、２０１３年12月14日ついに新しい命が誕生した。出産に立ち会うことはできなかったけど、生まれてすぐに会うことができた。小さな小さな手。まだ開かない目。全てがかわいかった。うれしかった。母もとても笑顔だった。それから少したち、母が退院して家に帰ってきた。家には、母の友達がくれた出産祝いの品や新しい子供服などがたくさんあった。でも、楽しいことばかりではなかった。母は赤ちゃんの世話だけでなく、自分達のご飯や洗濯物、洗い物など、毎日とてもいそがしそうだった。そして何より大変だったのが夜泣きだった。毎晩毎晩寝られない日々が続いた。日がたつにつれてどんどんやつれていく母を見て自分にできることをもっとしていかなければと、強く思った。積極的に赤ちゃんの世話をした。おむつをはきかえさせたり、服の着替えをしてあげたり全力で母を支える努力をした。

「いつもありがとう。すごい助かるわ。」

母に言われたこの一言がとてもうれしかった。大変なこともたくさんあったが、その倍以上に楽しいことがたくさんあった。寝返りができるようになったり、声を出して笑ったり、1つ1つの成長が本当にうれしかった。そして、6年がたった今。妹も6才になった。今では母とけんかができるぐらいにまでなった。1人でトイレにも行ける。ご飯も食べれる。今では1人でどんなことだってできる。

「私やってあげようか?」

「いいよ。自分でできる。」

今では、こんな会話もできる。この成長がうれしいようで少しさみしい。かわいいところもたくさんあるけど、腹が立つこともたくさんある。私のものを荒したり、勝手なことをしたり、けんかも日常茶飯事だ。でも、生まれてくる前と今では私達みんな明るくなったと思う。笑いがたえない日々。毎日が楽しくとても充実した日々を過ごすことができている。一日一日を大切に過ごしていきたい。

「妹できて良かった?」

よく母が私に聞いてくる。私はそのときいつも笑顔で、「当たり前やん」と答える。母も笑顔でとても幸せそうだ。少子高齢化や多くの子供がなくなる事件など、そんな話ばかり耳にする。新しい命こそ大切にし、全員が幸せな生活をおくれるようにしたい。

「私が生きていること」

王寺町立王寺中学校　二年　中谷　真優

私は、五四八グラム、三十・五センチメートルで生まれた。未熟児だった。母親のお腹の中にいた時間は七カ月。手の平ぐらいの大きさだったという。私は生まれてすぐに、新生児集中治療室というところに入った。保育器の中に入れられた。口からは人工呼吸器、胸にはモニター、腕には点滴をしていた。生まれてから二回目の体重測定では四五八グラムだった。生まれたときより九十グラムも軽くなってしまった。授乳量もたったの二グラムだった。少し日がたった頃、両手に着けていた、くだが取れた。そして体重も少しずつ生まれた時の体重に近づいてきた。その時の足の小指の大きさは、直径一ミリメートルにも満たなかったらしい。

一カ月ほどたった頃、肺まで入っていた呼吸器がついに外れた。その時、初めて母親は保育器の中で抱っこをしたらしい。とてもうれしかったそうだ。呼吸器を外したことで声が出せるようになった。初めて私が出した声はとても小さく、ネズミのような声だったとメモに書いてある。

私が生まれて初めて、お風呂に入ったのは生まれてから、二カ月後のことだった。しかしまだ小さかったのでお風呂というより、ボウルに入れてもらったそうだ。その時の写真と生まれてすぐの頃の写真を見比べてみると全然、大きさがちがっていた。私は当時の写真やメモを見て、エピソードを聞いて感じたことは、たくさんの人に助けてもらい、大切にされていたということ。毎日のように病院に来て、成長を喜んでくれた、父と母。それだけでなく大きくなった今でも、大切に育ててくれていること。私はとても感謝している。だが、私を助けてくれた人は、父と母だけではない。看護師さんやお医者さんだ。一年くらい前に会いに行った時に、この人たちも私のことを、助けてくださったことを知った。私は未熟児だった頃の話を母親から聞いたり看護師さん、お医者さんに会って、思った。私も未熟児で生まれた子たちを助けたい、未来を与えたい。私がたくさんの人に助けられ今まで元気に生きてこれた分、これから生まれてくる赤ちゃんたちの力になって、その助けた赤ちゃんたちが大きくなって元気に過ごしているところを見たいと思った。未熟児で生まれてきたからこそできた夢を、かなえるために頑張ろうと思う。

優秀賞（中学生）

「命に対する思い」

私立近江兄弟社中学校　三年　鹿野　藍流

普段、生活している中で「死ね」や「殺す」などの命を軽く見るような言葉をよく耳にすることが多いと思います。実際、この言葉を言ったことがない、と言う人は少ないのではないでしょうか。私も命を軽く見ていました。死ぬことに対して私にはまだまだ遠くて他人事だと思っていました。

私の両親は仕事が忙しく、近所の叔父、叔母、いとこの家に遊びに行っていました。叔母は私を色々な場所へ連れて行ってくれました。私にとって第二の母のようなものでした。

私が小学五年生の時、母から叔母がガンになったと伝えられました。その頃の私は、ガンはなってもドラマのようにすぐ治るものだと思っていました。市の医療センターに入院していた叔母は髪は抜け、やつれていましたが、退院し、その後も私を遊びに連れて行ってくれました。「やっぱり治った」そう思っていました。

しかし、叔母は再入院することになりました。母には学校を休むように言われ、遠くに住んでいる親戚まで来ていて、何故そこまでしなければいけないのか、その頃の私には理解できませんでした。

病院では叔母とテレビを見たり、色んな話をしました。私が練習し、作った料理を叔母は病気のストレスでできた口内炎がどんなに酷くても食べてくれました。叔母の病気を深く理解できていなかった私にとってはとても楽しい日々でした。

しかしある日、みんなで一言ずつ叔母にお別れを言うことになりました。この時私はこの病院がホスピスであることを知りました。私は何と言えばいいかわからず、黙ったままでした。すると叔母から、

「あの子のことよろしく」

きっと、いとこのことを言っていたんだと思います。昔から本当の姉弟のように仲の良い、いとこでした。涙が止まりませんでしたが、そんな中でも私は「絶対大丈夫」と心のどこかで思っていました。

それから数日たったある日、いとこみんなで遊んでいた時、看護師さんに呼ばれ叔母の所へ向かうと叔父、祖父、祖母、母が泣いていて、その中央には眠っている叔母。私は困惑し、涙を流すことができませんでした。いとこは亡くなった母親と向き合うことができず、ずっと叔母との写真を見つめていました。その姿は今でも鮮明に覚えています。私は、叔母が体を痛がっていた時にそばにいたのに怖くて何もしてあげられなかったことがあり、そのせいで叔母が亡くなり、弟のように可愛がっていたいとこから大事なたった一人の母親を奪った、そう思い込みそんな自分が許せませんでした。

しかし、そんな私が見たのは、母親、そして妻の死を受け入れた、いとこと叔父でした。いとこは母親がいない生活を、叔父はシングルファーザーとしての生活をたくましく生きていました。母も叔母は私を恨んで天国に行ったわけじゃないと言ってくれました。

私は叔母のおかげで大きく成長し、強くなれたと思います。今まで軽く見ていた命の尊さ、大切さを感じ考えることができました。今でも叔母に会いたいと思うことは多くあります。いつも近くにいる人が明日もいるとは限らない、当たり前のように身近な人が元気に過ごしているありがたさにも気づけました。叔母は私にとって本当に大切なことを教えてくれました。

最近のニュースでは学生の自殺が目立っています。私はある番組で自殺を考えている人は自殺のサインを出していて、身近な人がサインに気づき、さりげなく声をかけてあげることが大切だと聞きました。叔母が与えてくれたことを生かし、もし身近な人でサインを出している人がいたら、少しでも寄り添えるような人になりたいと思いました。

命の尊さ、大切さをたくさんの人が気づけるような世の中になってほしいと思います。

「生きる意味」

私立近江兄弟社中学校　三年　小林　愛果

小学校二年生の冬、私のお父さんは突然亡くなってしまいました。私はその日のことを未だにはっきりと覚えています。

突然大切な人がいなくなるってこんなにも寂しくて、辛くて生きた心地がしないものなんだと私は初めて感じました。

毎日一緒に朝を迎えて、朝ご飯を食べて、笑顔でお互い学校や会社へ向かいまた夜一緒にご飯を食べて、お風呂に入り一緒に寝る、こんな当たり前の様に過ごしていた毎日が突然一つの命がなくなったことによって変わってしまいました。

私はお父さんが大好きです。時にはすごくしかられて、でも毎日仕事で疲れているのに私たち家族の前では笑顔で笑わせてくれる、おもしろくて優しいお父さんでした。そんな家族の一人がいなくなるなんて思ってもいませんでした。ずっと私が

優秀賞（中学生）

大人になって歳をとるまで一緒にいられると思っていました。

お父さんが亡くなってから、お母さんは、毎日泣いてどんどん痩せていき、私もそんなお母さんの姿を見ているのが辛くなってきました。小学二年生ながら私はお母さんや弟を支えていかなければいけないなと思いました。その日から当時八歳の私と五歳の弟は少しの力ですがお母さんの手伝いをしてお母さんに少しでも楽になってもらおうと頑張りました。

お父さんが亡くなってからお母さんはいつも口癖の様に「お父さんの分まで私たち家族三人は生きなあかんで」と言いました。その言葉に私は、改めて命の大切さを感じました。

私のお父さんは三十五歳の誕生日を迎える前に亡くなってしまいました。お父さんのお母さんも三十代で亡くなっているので、私はおばあちゃんに会ったことがありません。でも今、私がここに生きているのはお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、ご先祖様が命のバトンを繋いでくれたからです。だから私たちはそんな人たちが繋いでくれた命を大切にし、強く生きていかなければいけないのです。

大切な人がいなくなってから気づくことはたくさんあります。なので私はこの作文を通して、今当たり前のように一緒にいる人も突然いなくなってしまうかもしれない、そんな時絶対後悔しない様に今目の前にいる人を大切にしてほしいです。これは大切な人を失った人にしかわからない気持ちかもしれませんが、下手でも不器用でもいいから今当たり前にいると思っている人にちゃんと素直に感謝の気持ちを伝えてほしいです。

今では自殺やリストカットなど自分を自ら傷つけてしまっている人が多くなってきています。差別や偏見によって耐えられなくなって自殺する私くらいの歳の人や、ストレスなどによって自分の身体を傷つけたりする人がいますが、自分がいなくなって悲しむ人は自分自身が思っているよりもたくさんいると思います。今生きている人は、今生きれなかった人たちの分まで精一杯生きることが今生きている人の最大の役目だとお父さんが教えてくれました。

お父さんが亡くなってからもう七年が経ちました。今ではお母さんも弟も私も元気に過ごしていますが、やっぱり食卓に一つ空いた席があるのを見ると今でも寂しくなります。かけがえのない命がなくなるということは、残された家族にとって、大きな影響を与えます。今でもお父さんから言われた言葉が頭の中に残っています。「お父さんは小さい頃あまり裕福なくらしができなくて辛い思いをしたから、二人にはそんな思いはしてほしくない。」私たち家族のために幸せをつくってくれたお父さんに感謝しています。

命があるのは決して当たり前ではない、むしろ命があることは奇跡なのだと十五年間の間で学びました。

お父さんはそんなことを私たちに気づいてもらいたかったのかなと思いました。これからもお父さんの分まで生きていきます。

「操り人形」

京都市立双ケ丘中学校　三年　山本　奏世乃

「いのち」とは何か。答えられますか。命でしょうか、生命力でしょうか、生きていけるエネルギーの源でしょうか。この問いは哲学者でも医者でもどんなに賢い人でもコレだと答えることは難しいのではないでしょうか。私は「いのち」を私なりに考えてみることにしました。

「いのち」は「命」ではないのか。まずこれについて考えてみました。私はこの作文のテーマを見たときになぜ漢字で書かれていないのか気になりました。何か違いがあるのではないのかなと思い、考えてみることにしました。「命」はどこか淡々とした感じが私のなかにありました。漢字はカクカクしていて「いのち」という温かくほっこりした、それでいて情熱的なイメージには合わないと思いました。「命」は「いのち」を表わす言葉、単語であるのだという結論にいたりました。「いのち」というのはとてつもなく広いもので、不思議だと思います。ですから辞書などに書く際に「命」というたんなる単語を用いたのだと思います。たんなる単語と書きましたがそれ以上どう表して良いかわからなかったのです。それは「命」からは「いのち」から感じとれる温かみや情熱を感じ取れなかったからです。だから「命」と「いのち」は違うものだと私は思いました。

次に「いのち」とは一体何なのかを考えてみることにしました。人は命があるから生きられます。これは誰でも知っていることです。でも「いのち」が何なのかはよくわかりません。仮に生きていけるエネルギー源としてみるとなんとなくそれっぽいと思いました。でもそれじゃあ車のガソリンと変わりません。そうじゃないと思いました。「いのち」は私が産まれる前に私に備わり、今は私と共にいます。そして私が死ぬとき「いのち」は尽きるのです。いつ備わりいつ尽きるのか医者でも自分自身でもドンピシャでは当てられません。自分自身のことなのに自分でわからないなんておかしいと思いませんか。いつ死ぬのか

優秀賞（中学生）

なんて考えていたこともあります。まるで「いのち」に操られているみたいです。「いのち」とは自分自身を左右する自身に備わった黒幕なのです。

実際「いのち」に左右されるということは「いのち」があるから死んだほうがましだ、という考えになり自殺したり、「いのち」があるから殺されたりするのです。でもそれだけではありません。「いのち」があるから楽しいこともあるし、死にたいと思うことができるのです。「いのち」を利用し、逆に操れば黒幕はなくなり自分自身として生きていけるでしょう。

「叫び」

吹田市立第一中学校　三年　武田　愛未

私がいつものように通学路を歩いていた時のこと。救急車が悲報を叫びながら、私の目の前を通過していった。私はいつもこの叫びを聞くとあることがフラッシュバックする。

それは四年前のことだ。その日は塾の帰り、真っすぐ家に帰ろうとしていた。そんな私の目の前で一人のサラリーマンがベンチに座っており、息が荒かった。それを見た主婦三人がその男性に駆け寄り救急車を呼んだ。男性の苦しそうな表情、主婦三人の行動が、目、耳、いや全身に焦げるほど焼きついたのだ。当時小学生だった私はとても恐怖を覚えた。

その恐怖を感じるのは、今でもある。いつでもあの叫びを聞くだけで背中がゾワゾワするのである。

それはなぜか。

その答えは明白であった。それは「命をかけた叫び」だからである。一分一秒、なにげない時間の中で、命の危機を目の前にした叫びであり、一人が何百人に示すことができる最も大きなSOSを、私は一人の人間として無視をすることができないのだと思う。

私がこの話を友達や塾の先生にすると、「いい子だね」とか「偉いね」という言葉をかけてもらっていた。でもそれは違うと思う。私はただ叫びに耳を傾けているだけで何も行動できていない。あの時行動できていた、主婦三人の様にはなれていない。なのにこの話をするとみんな私を褒めてくれる。その当時は心地がよく天狗になっていたかもしれない。あぁ恥だなぁと今となっては思う。

ではなぜ私は褒めてもらえたのか。

それは、その人たちの常識という辞書に「救急車の叫びに耳を傾ける、命の叫びに耳を傾ける」ということがないからだろう。とても悲しいなと思う。辞書にないということは命についてあまり考えていないということだ。

もしそういう人たちの常識という辞書に、命の叫びについて書かれれば、一人の人間の命の危機に向きあうことができるのではないだろうか。

「命の叫び」に耳を傾けるだけで、叫んでいる人の大切な一分一秒を守っているということを、みんなが考えられる世の中になった時、命の大切さが分かるのではないだろうか。